

安曇野市豊科郷土博物館

紀要 第2号



平成27年 3 月

安曇野市豊科郷土博物館

オフネ祭りの展開－諏訪大社と穂高神社



写真1 諏訪大社下社のオフネ



写真2 穂高神社のオフネ



写真3 木造単体道祖神像（大町市借馬 平成12年）

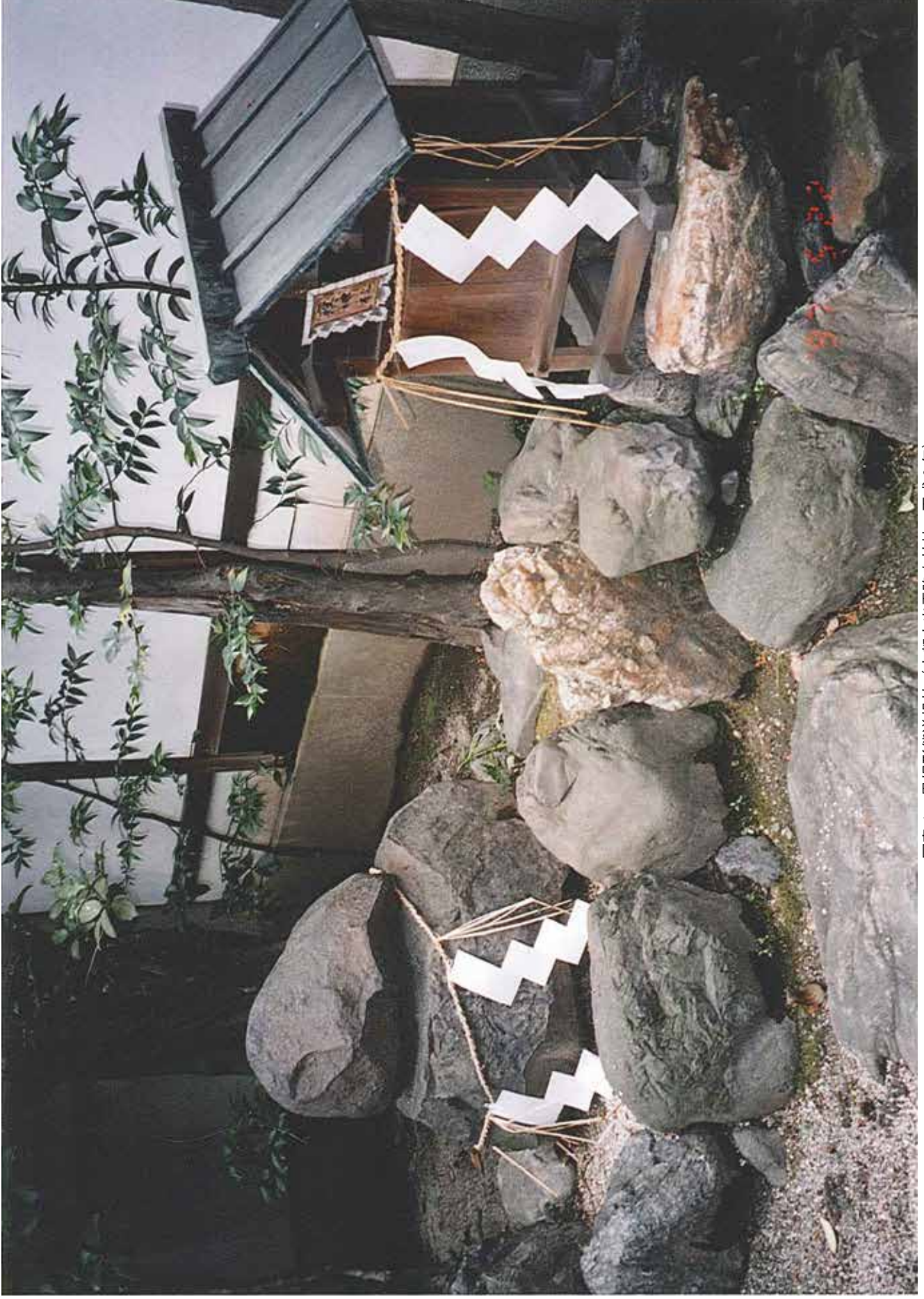
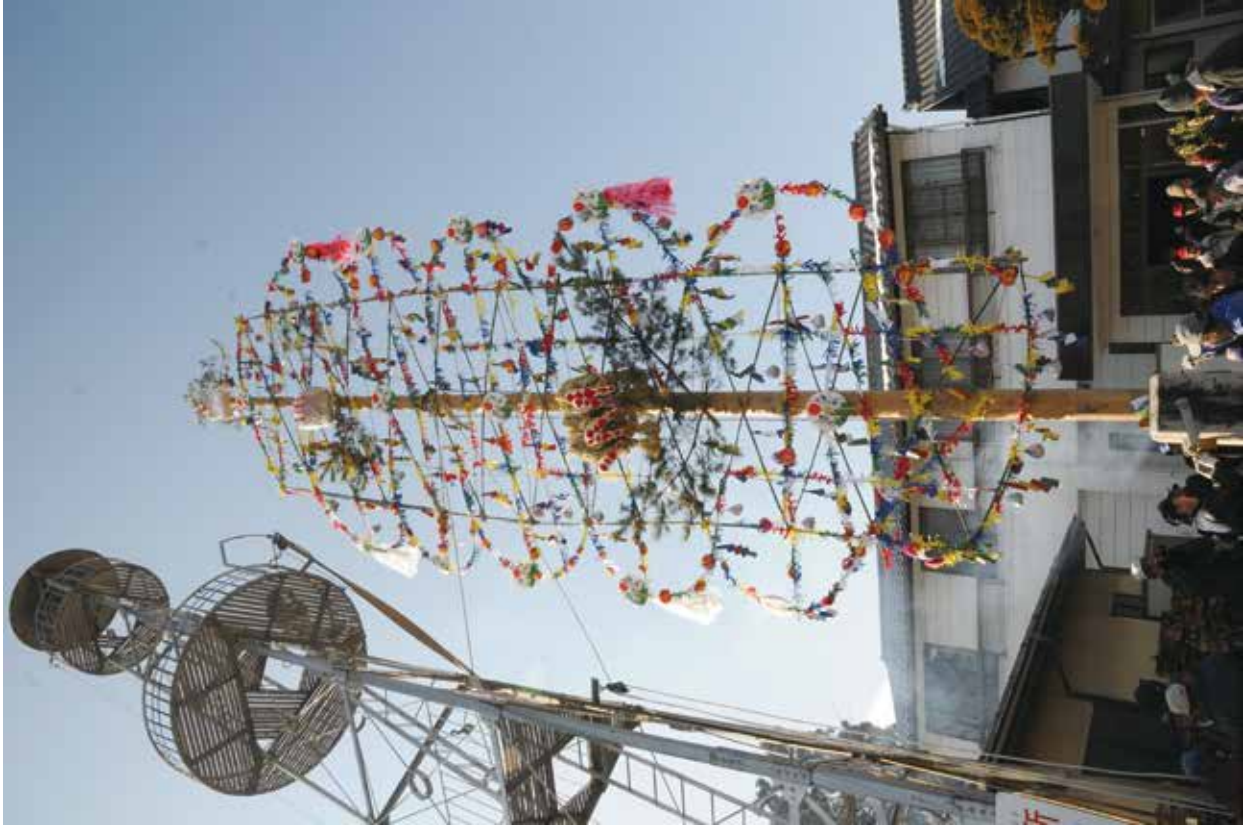


写真 4 男根形慈道祖神（京都市出雲路幸神社 平成 9 年）



豊科新田御柱 (平成25年)



豊科北小と新田御柱



穂高柏原倉平御柱（平成26年）



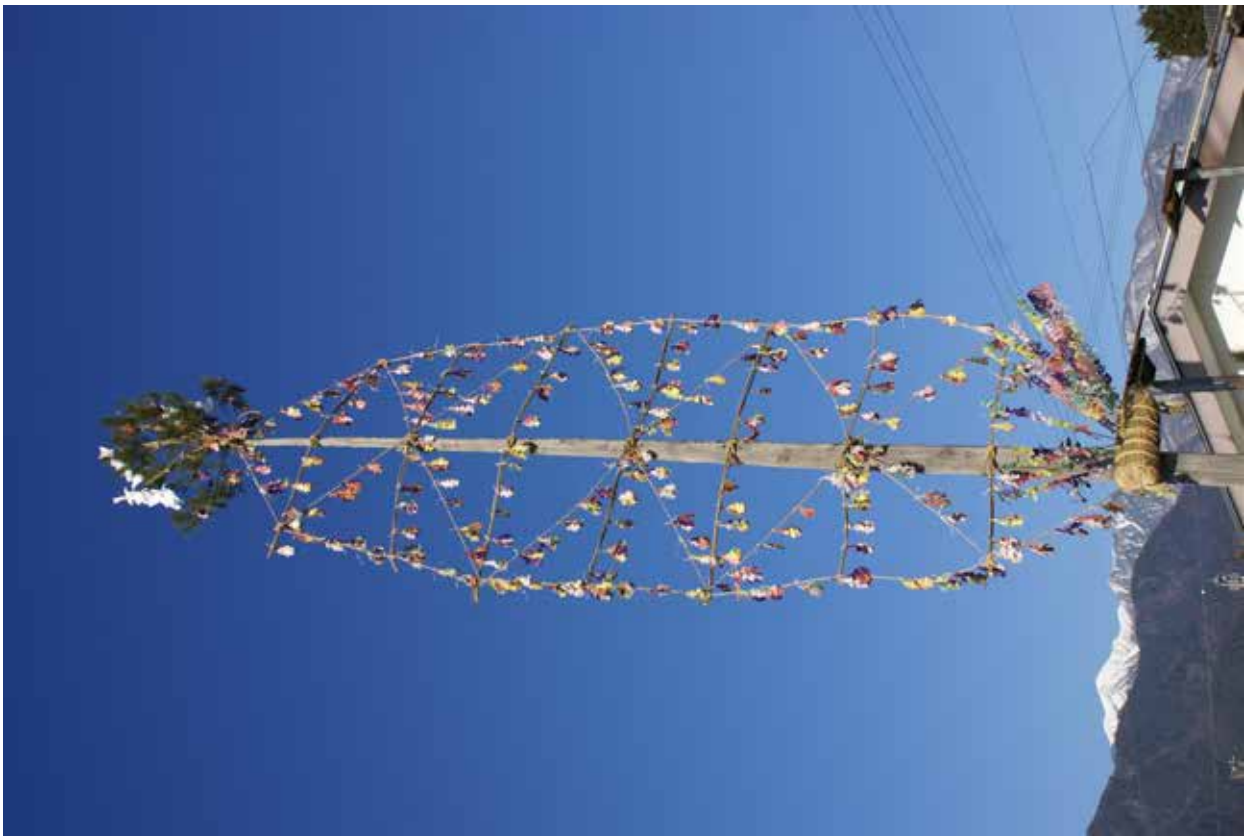
穂高西小と倉平御柱



三郷明盛一日市場上町御柱 (平成26年)



三郷小七一一日市場上町御柱



堀金田尻南木戸御柱 (平成26年)



堀金小と田尻南木戸御柱

安曇野市豊科郷土博物館

紀要 第2号

目次

- 「安曇野のお祭り展Ⅰ～オフネがつなく地域の輪～」講演会
オフネ祭りの展開—諏訪大社と穂高神社—
三田村佳子 …………… 2
- 道祖神シンポジウム「道祖神が拓く安曇野の未来」基調講演
安曇野と道祖神信仰
倉石忠彦 …………… 17
- 学校と連携しながら進める展覧会事業
～若年層開拓に向けた博物館の取り組み～
逸見大悟 水谷優美 宮本尚子 百瀬新治 …………… 37
- 安曇野に残る「あの世」の風景
——栗尾山満願寺を中心に
逸見大悟 …………… 49

オフネ祭りの展開—諏訪大社と穂高神社—

三田村佳子

本日は、オフネ祭りの展開というテーマでお話しをさせていただきます。皆さんは地元の方ですので、展覧会（「安曇野のお祭り展Ⅰ～オフネがつなぐ地域の輪～」）をご覧になったり、実際にオフネを担いだりという方が大勢いらっしゃると思いますが、長野県では安曇野以外にもたくさんオフネの形をした山車があります。それが各地のお祭りです。ひとつの特徴となっていますが、オフネがどのようなもので、またそれらがどのように繋がっているのかということについてお話をしようと思います。

長野県は日本の屋根ともいわれ、当然山ばかりで海はありません。それなのに、何故こんなにたくさんのオフネが出るのだろうか、というのが私の最初の興味でした。

そこで、実際はどうなっているのか調査をしてみたところ、たくさんの面白いオフネを見せていただき、またお話を聞くことができました。

実際にオフネの分布や歴史的な経緯や形態などを見ていきますと、長野県にこれだけたくさんのオフネが伝承されているのは、どこかにその核となる、源流となるオフネが存在するのではないかと考えました。そしてそれはおそらく諏訪神社、今は諏訪大社と呼んでいますが、この諏訪大社に古くから伝わるオフネ祭りのオフネであろうと仮説を立てました。諏訪大社では素朴で大きなオフネが出ていますが、そのオフネが最初にあり、それが原形となって周辺のあちこちに広がっていったと思われるのです。

それでは、その諏訪大社のオフネはいったいどういうものなのかということをお話させて

いただきます。諏訪大社は年間に数多くの神事が行われる神社であり、長野県だけでなく全国各地に大きな影響を与えています。特に知られているのは7年目ごと（実際には6年に1回）に行われる御柱祭です。これは全国に響きわたっている有名なお祭りですが、それ以外にも県内各地に大きな影響を与えたお祭りがたくさんみられ、オフネ祭りもその一つです。

諏訪大社には二つのオフネが伝えられています。御存じの方も多いたと思いますが、諏訪大社は特殊な神社の形態をしています。普通の神社は社が一つなのですが、ここは大きく下社と上社に分かれ、さらにそれぞれが二つのお宮をもっていて、計四つの社があるのです。

この上社・下社ともにオフネが伝えられていますが、とくに下社のオフネ祭りが有名です。諏訪湖北岸にある下社には春宮と秋宮と二つの社があるのですが、8月1日に行われるオフネ祭りでは、春宮から秋宮へと神霊が乗ったオフネが向かいます。

それからもうひとつ、上社でもオフネは登場します。上社は諏訪湖のちょうど南側にあり、やはり前宮と本宮のふたつの社をもっています。そこで先ほどお話ししたように、申年と寅年すなわち6年に1回、春に行われる御柱祭があり、そのなかでオフネが登場しますが、それについては後でお話させていただきます。

最初に下社のオフネについてですが、オフネ祭りは毎年行われています。正式名称は遷座祭といひまして、諏訪大社の神様は半年ずつ春宮と秋宮にお住まいになるとされ、旧暦1月1日から6月

末まで半年は春宮にいらっしゃって、7月から12月までの後半の半年間は秋宮にお住まいになるといわれています。つまり、半年ずつで神様がお社をお移りになるわけです。遷座祭というのはそのときに行われるお祭りです。このため、遷座祭は1月と7月の2回、今は新暦になって月遅れの2月1日と8月1日の年2回に行っています。

この時にオフネが曳かれて、神様がそれに乗って春宮と秋宮の間を移動するのですが、実際にオフネが出るのは8月1日の1回だけです。2月1日の秋宮から春宮への遷座祭にオフネは出ません。御正台と呼ばれる神霊の依代を担いでの行列があるだけです。8月1日の春宮から秋宮へ戻るときだけに、大きなオフネが出るのです。それに神様が乗っていかれるという非常に勇壮なお祭りであり、安曇野からも近いのでご覧になった方も多いと思います。

このオフネ祭りがいつ頃から始まったかということは、よくは分かってはいないのですが、文献で最初にみられるのは室町時代です。そこでは「鉾山」という名称で出てきますので、鉾を立てた杵や山のようなものであったのではないかと思われませんが、はっきりとは分かりません。その後、今と同じようなオフネ祭りの詳細な記録が出てくるのは、延宝7年(1679)、17世紀の後半になります。その記録には、明らかに現在のオフネ祭りとはほとんど同じ様子が描かれておりますので、実際にはそれよりかなり以前から行われていたのではないかと思います。

諏訪大社のオフネは大きなもので、現在は長さが10m、重さが2.5tあります。6本の柱を立てた直方体のヤグラ(檣)があり、その前後に扇形に3本ずつ芻ね木が張り出しています。それが基本構造になっており、その上に山から採ってきた柴をたくさん周りに巻き、さらに幕をつけます。それだけ見ると、これが船かなと思うほど単純な形になっています。

祭り当日には、まず秋宮から春宮へ迎いの行列があり、その時に人形(御神体)2体を一緒に持って行き、春宮に準備されているオフネに乗せます。この人形は翁と媪、つまりお爺さんとお婆さんの姿をしていますが、この二人は諏訪大社の祭神である建御名方命と八坂刀売命の夫婦の神様だといわれています。地元ではこの諏訪神夫婦が諏訪湖で舟遊びをしている姿を表していると伝えており、実際にお爺さんは釣竿を持ち、お婆さんは腰に魚籠を下げています。人形が乗せられてオフネが完成すると、春宮から秋宮へオフネが移動して行きます。重たいオフネを大勢で曳いて歩く、というより実際には引きずって進むという感じが適切のような気がしますが、明治時代の絵を見ると、もともとこれを担いでいたのがわかります。かなり大勢で担がないと担げないでしょうし、だんだんと重たくて大変だということになったのか、昭和10年頃から下に櫓をつけて曳くようになりました。安曇野のオフネと違って車がついていないのでとても曳きにくいのですが、それでも無理やりに引きずるので、通った後はアスファルトの道路にその跡が残っているほどです。今は木遣り唄を唄って囃しながら曳いていますが、それも昭和10年頃から始まったものですし、またオフネに人が何人も乗るようになったのもその頃からだといわれています。

オフネが秋宮に到着しますと、そこから神楽殿を右回りに3周します。その後、正面に来ますとオフネの人形を外し、さらに幕も外してから左に右にと大きく揺らします。大きく振って壊すような仕草をします。今はオフネのヤグラがしっかりしているので、それぐらいでは壊れないのですが、おそらく昔は壊していたのだと思います。それが終わると解体して柴を外し、それをみなさんが拾って帰って、玄関に掲げて魔除けにしたりします。柴にはそうした力があるものとして大事に扱われたのです。

この簡単な形をした下社のオフネが、長野県の各地に色々な形で伝播しています。形も少しずつ変わっていつていますので、個別の説明をする前に全体の流れとといいますか、オフネの形態の変遷を述べておきましょう。

まずオフネを大きく二つに分けて、臨時のオフネと恒久のオフネとします。臨時のオフネというのは毎年新しくつくるもので、今は諏訪大社も大きいヤグラの部分の丸太とかは使いまわしていますが、本来はすべて新しくつくっていました。元々は毎年新しく臨時につくったのです。それに対し、すでにできているものを毎年保存しておき、それを曳き出して使うのが恒久のオフネです。この二つのオフネのパターンが長野県で見られます。

最初にあげた臨時のオフネは、さらにその形から大きく3種類ほどに分けられます。まず諏訪大社を中心にしてその周辺部の諏訪地方に、それほど数はないのですが、諏訪大社と同じようなシンプルな形のオフネがあり、それを分かりやすいように仮に「諏訪型」と名付けておきます。2種類目はこの地元の安曇野にあります。穂高神社を中心とした周辺地域、つまり安曇野地方には、非常に大きくて、華やかな人形飾りを特徴的としたオフネが広くみられるのですが、これを「穂高型」とします。それからもう一つ3番目には、ここから北の池田町にある池田八幡宮を中心にその周辺部に見られるオフネで、これは穂高型とは違ってまた単純な形になっています。人形飾りが取れてなくなって幕飾りが中心となり、幕で囲われた槽の中に囃子方が乗っています。池田八幡宮が中心なので取りあえず「池田型」と名付けておきます。大体そういうかたちで分けられるかと思います。

それに対してもう一つの恒久のオフネというのは、松本市の須々岐水神社すずきがわじんじやを中心にしてその周辺部に広がっています。地名が里山辺という所なので「里山辺型」としますが、彫刻飾りをし金箔も施された非常に豪華なオフネなのです。いわゆる一般的

な山車の形をしたオフネで、「とてももったいなくて毎年壊すなんて冗談じゃない」、そういう立派なオフネなのです。

以上を、さらに具体的にどういうものか見ていきたいと思います。

最初の諏訪型のオフネというのは、場所は諏訪の他に松本市、上伊那郡辰野町や箕輪町、安曇野市、佐久市など数は少ないのですが、ぼつぼつと散在して広い分布で見ることができます。

松本市筑摩の筑摩八幡宮で行われているオフネ祭りは、地域別に2艘のオフネが出されます。もとこの神社は諏訪大社とも非常に関係が深いところで、近世には諏訪大社、特に下社と関係があり、下社のお祭りに出向いて舞を奉納したという記録も残されており、下社の支配下にあったようです。おそらく、こうしたことからオフネが伝わったのだと思います。

今は8月11日に行われていますが、かつては旧暦の6月11日の夏のお祭りでした。一度途絶えて、大人のオフネが子どものオフネとして復活したので、もとのオフネよりかなり小さくなっています。本来は長さが3間、つまり5m半くらいありました。構造は基本的に諏訪のオフネと同じであり、ヤグラがあって柴をたくさんつけて幕をまわしています。ただ一つ違うのは乗せている人形が2体ではなく、3体あるということです。諏訪大社では翁・媪の人形だけだったのですが、ここにはもう1体あり、それは誰かという祭神である八幡様なのです。このオフネを担いで、やはり神楽殿をまわるのですが、近世の頃には松本藩主から旗や長槍が寄進されたといい、現在も小さいながらそれらを先頭にして神楽殿を3周します。

これだけなら諏訪大社と同じですが、かつてはこの2艘が競走して勝ち負けを争ったといい、昔は大変な喧嘩騒ぎになったという話を聞いています。またこれも諏訪大社ではみられませんが、こ

ちらではオフネがまわり始めると、その中心である神楽殿で宮司が両手に剣を持っての剣の舞が始まり、オフネがまわり終わるまでずっと舞っています。



筑摩のオフネ

辰野町の神明神社の天狗祭りに出ているオフネも同じく諏訪型です。ここでも祭日がかつては旧暦6月16日でしたので夏祭りでしたが、現在は遅くなりまして10月の第3日曜日になっています。名称は「天狗祭り」といいます。このオフネ、これまでと少し形が違うようにもみえます。上に柴ではなくて笹、笹竹が丸ごとたくさん積んであるので、ちょっと雰囲気が変わっていますが、基本的には同じ立方体のヤグラが真ん中にある、長い竹を両側に突き出して船形にして、周囲に青い波を書いた幕を張っています。写真のなかで右手に青いものを持っている人がみえますが、これは傘鉾です。この傘鉾を持った人を先頭にして太鼓を打ち鳴らしながら、境内をぐるっと3周します。やはりここでも3周しているのですね。

そうした後、このオフネの中から獅子が出てきて、周りにいる人々を噛んで廻るのですが、それが魔除けになるといわれています。さらに獅子の後には天狗が出て暴れまわります。そこから天狗祭りと呼ばれています。ちょっと変わったお祭りの形態をしているのですが、基本的に諏訪と同じ単純な形のオフネがここでも出されているのです。



辰野町のオフネ

同じ上伊那郡にある箕輪町南小河内では、オサンヤリという行事が行われます。オサンヤリという言葉は聞きなれない言葉ですが、地元では「災を遣る」という意味で「御災遣り」という漢字をあて、疫病除けのお祭りとして行っています。

もとは8月の八幡神社のお祭りだったようですが、後になってその時期がお盆に移り、「盆祭り」といって旧暦7月の14日から16日まで実施してきました。近年は月遅れになり8月の3日間に行っていたのですが、現在は日数も減って8月15、16日の2日間になっています。

注目したいのは、ここのオフネの形態は枠組みしかないことです。ヤグラがありその上の両側に刎ね木を張り出して、わずかに柴を巻きつけ、綱をわたして提灯や御幣を吊るしてあるだけで、幕すら垂らしていないのです。このオフネを担いで3日間毎日村廻りしたのですが、その時は提灯や御幣も外してしまいます。

そして最後の日の夜にオフネが壊されますが、ここでオサンヤリが登場します。オサンヤリという言葉はこの行事の名称ですが、それ以外にも使われます。広場に穂先だけ残した8mものクヌギやナラの木をたくさんたてるのですが、これもオサンヤリと呼んでいるのです。これをみると正に「槍」ではないかと思われ、武器の槍という意味でも使っているようです。

このオサンヤリの周りを最終日にオフネが3周

すると、オフネを横に倒して壊しますが、徹底的に壊しており、ヤグラの頑丈な材木もカケヤを使って粉々に徹底的に壊してしまいます。その壊した欠片は、持って帰って玄関の魔除けにする、そういうお祭りがここでも行われています。ヤグラしかないオフネは、とくに古い形を残しているように思われます。



箕輪町のオフネ

次に紹介するのは松本市入山辺にある大和合神社のお祭りです。ここも祭神はお諏訪様です。古くは旧暦7月27日に行われていましたが、今は4月29日春祭りに移動しています。

ここでも同じ構造のオフネが出ています。諏訪大社のオフネと非常によく似ているのですが、柱が6本から8本に増えています。それから両側の刎ね木ですね。幕を吊るす刎ね木が二重になっています。中央に松が立てられ赤い幕が張りめぐらされており、諏訪大社と同じように御神体の人形、翁と媼の人形が乗せられています。やはり神楽殿を3周します。基本的に形も神事の内容も諏訪大社と同じものが、地域の離れた松本のはずれにも残されているのです。

それからもう一つ、私より皆さんの方がご存知で、今回の展示にも登場していますので、わざわざ説明するまでもないのですが、安曇野市岩原のオフネです。これらも、もともとは8月28日だったのが現在は4月29日に変わっています。

当地のオフネももっとも単純な形をしておりま

して、ヤグラの両側につけた刎ね木に三色の幕を垂らしているだけです。ヤグラも4本柱の小さな立方体であり、非常にシンプルな形をしています。これは皆さん実物を実際にご覧になっていらっしゃるの、よくお解りかと思えます。

ここでも同じようにオフネは境内に入ってから本殿前にある千度石といわれる石の周りを3周します。今まで紹介したオフネは、社殿や神楽殿の周りをまわっていたのですが、ここではその代わりに千度石と呼ばれる石が登場します。写真ではわかりにくいのですが、立木の上に注連縄が張ってある石が見えます。それが千度石です。その後、この神社はかなりの斜面のある山の上に建てられているのですが、そこから斜面を転がり降ろすように、オフネを回転させながらしだいに壊していく、特に刎ね木などは完全に壊れるようになるまで転がしていきます。かなり荒っぽく、太鼓を鳴らしながら何度もオフネをひっくり返しながらか下まで降ろすのです。



岩原のオフネ

次は、今回の話の中心である穂高神社のオフネを核にしてお話します。これまで述べてきた諏訪型に対して、そこから穂高に伝わり、人形飾りが加わって大きく花開いたオフネとして、穂高神社を中心とした穂高型があります。

穂高神社の祭神は穂高見命といって海神・綿津見命の子です。要するに海の神様で、おそらく海人族といわれる安曇族の子孫だということから

きたのだと思います。安曇族という、もともとは北九州に拠点をもっていたとされ、そこから信濃に來たといわれています。歴史的事実かどうかは明らかにはなってはおりませんが、各地に残る伝承などから、日本海を北上して上越の姫川をさかのぼって安曇野にやって來たと考えられています。

穂高神社は中世の頃から諏訪大社と非常に深いかわりを持っていて、遷宮に際してかつては御柱を建てたり、あるいは南宮御宝殿という諏訪大社と同じような形式の社殿があったり、さらには諏訪大社、特に下社の行事が行われる際には当社から役を出して手伝いにも出かけています。こうしたことから諏訪大社の影響が非常に大きかったことがわかります。その関わりのおかげで、下社で行われていたオフネ祭りも採り入れられたのでないでしょうか。穂高神社では現在9月27日にオフネ祭りが行われています。

オフネの形態はもともとの基本は諏訪神社と同じ構造で、ヤグラを中心に前後に刎ね木が張り出していますが、その上に人形飾りをして背景をつくったことによって、表と裏が誕生したのが、特徴のひとつだと思います。

このオフネ祭りがいつごろ始まったのか明確なことは分からないのですが、正徳5年(1715)の記録が最古であり、その時すでに現在と同じオフネがあったと考えられてきました。それがこの度、それより古い文献が発見されたと聞かされました。⁽¹⁾元禄2年(1689)といえますから、これまでより20年以上も前のオフネの記録で、実際に今回展示もされています。かなり古くから、17世紀の終わりにはオフネが登場していたこととなります。

現在は大人船が2艘、子供のオフネが3艘の計5艘が出ています。オフネの構造ですが、長さが

12mとかなり大きなものです。真ん中に四角いヤグラ部分があり、その上の刎ね木の上の部分をやま(山)といっていますが、そこに人形や色々な背景をつけて有名な歴史場面や物語・伝説などを再現した飾り物がつくられます。大蛇退治であったり、源平合戦であったり、川中島の戦いであったり、最近はずいぶん大河ドラマも入るようですが、そういったテーマを取り上げて華やかに飾られます。どのようなデザインにするかは当日まで秘密とされ、今でも情熱を込めてつくっています。

その両側にある部分をハラ(腹)といっていますが、この部分も諏訪型と大きく違う部分の一つです。諏訪大社ではこの部分がまったくありませんでしたので、山の飾り物と同様、大きな相違点です。舳先の方をオトコバラ(男腹)とかオバラ、また後ろの艦をオンナバラ(女腹)とかメバラと呼んでいます。このハラに氏子から集めた晴着をたくさん飾っています。もちろん、オトコバラには男物の着物、オンナバラには女物の着物ということになりますが、特にオンナバラは金襴や刺繍もあるあでやかな晴着を飾るので、非常に綺麗で華やかなものになります。お祭りがあって戻された着物を着ると丈夫に過ごせるという信仰があり、率先して着物を提供したといえます。

このオフネも今は大きな車が付いており、実際に重たくてとても担げるような状態ではありませんが、かつては諏訪と同じように担いでいたといえます。それでも江戸時代の後半にはすでに車輪がつけられ曳くようになっていたので、やはり山の大きな飾りが影響して早くから車が採用されたようです。諏訪大社ではそれほど大きくなく、また飾りもないことから、昭和のころまでは担いでいたので、それはやまの飾りの大きさとか重さの差といえましょう。

この穂高神社のオフネも今までに紹介したオフ

(1) 逸見大悟「新発見！ オフネ祭り最古の古文書」『安曇野市豊科郷土博物館紀要』第1号 2014年

ネと同じように、神楽殿を3周します。非常に重たいオフネを曳きまわしています。3周した後に、大人のオフネ2艘のハラに付いている着物を外して幕をめくりあげ、向かい合わせになってぶつかり合いを何度も繰り返します。オフネの中にはお囃子の人が乗ったままで、囃子方はオフネがぶつかる度に跳びはねながらも演奏を続けており、見ていてとても迫力があります。この所作を繰り返すのは、一種の破壊行為を象徴的に表現したものです。実際には壊すところまではいかないのですが、そういう行為を繰り返すということで破壊したのと同じ効力があるとされたのです。



穂高神社のオフネ（ぶつけ合い）

この穂高神社の華やかなオフネの祭りが周辺地域に広がり、安曇野市を中心にその北側の池田町などに伝わっていますが、狭い範囲にたくさんのオフネがみられ、集中的な分布を示しています。多くの地域で皆さん熱心にオフネをつくって曳いていらっしゃいます。

今回の展示でもたくさん紹介されていますが、いくつか代表的なオフネをあげてみましょう。

三郷中萱の熊野神社ではもとは10月7日の秋のお祭りでしたが、今は8月の最終日曜日に行われています。長さが13m、高さが9mあり、県内で一番大きなオフネだといわれています。今は1艘しか出ていないのですが、かつては2艘出ている、穂高神社と同様にぶつけ合いが行われていたと聞いています。ただ途中で1艘が壊れてしま

い、なかなか復活できずにそれきりになってしまい、もうぶつけ合いはできなくなってしまいました。が、神社の神楽殿を3周するのは今でも行われています。



中萱のオフネ

次いで豊科重柳の八幡宮のオフネです。これも展示で見られますし、有名なお祭りで地元の方もご存じだと思います。もともと8月15日に行われていたのが、9月23日の秋祭りに変更されています。ここでも真ん中に大きな飾り付けがなされ、基本的には穂高型と同じオフネが出ています。ここは神楽殿ではなく、先程述べた岩原と同じように千度石の周りを3周し、最後に社殿の正面に向くと、そこで左右に大きくオフネを揺らします。これは波に揺られながら大海原を進む様子を表しているのだと聞きました。

三郷楡の住吉神社のオフネも、両側に大きな幕が張りめぐらされ、真ん中に人形飾りがあるという基本的構造はまったく同じです。ここはオフネが2艘出まして、もともと8月29日に行われていたのですが、現在は4月最終日曜日になっています。

明科萩原神社のオフネも、もともとは9月11日に行われていたのですが、現在は10月体育の日になっています。もともとはオフネが1艘だけですが、興味深いのは向かって右手、艦の方になりますが、このオンナバラの方は張りを強くして上の方に丸くとび出している部分があるの

ですが、これをコドモ（子供）と呼んでいます。これは女性の腹部を大きく膨らませて、つまり女性が孕んだ状態を表現したもので、コドモという名称からも明らかなように、豊穣祈願、五穀豊穣を願うという意味を込めているのです。

そして舟縁には蠟燭が150本ほど並べられて、夜になると蠟燭に火をつけて曳いて歩きますが、その様子はとても幻想的です。

同じような夜のオフネをもう一つ見ていただきましょう。明科の潮神明宮のオフネ祭りですが、「蠟燭祭り」との別名があるように、闇夜の光の曳行が人気です。もともと6月16日夏祭りだったのが、現在は5月5日に変更されています。夜になると船縁のたくさんの蠟燭に火をつけて曳いていくのですが、ちょっとでも風があると大変なんですね。私が見せていただいた日も風があってすぐに火が消えてしまうため、蠟燭をつける係の方は非常に苦労されていたのを覚えています。



潮のオフネ

明科塔ノ原の犀宮社のオフネも基本的な形態はすべて一緒ですが、前面の船縁に四角い灯籠、箱灯籠がずらっと並んでいるのが特徴的です。もともと9月9日だったのが、今は10月10日体育の日に変わっています。

穂高有明古厩の大宮神社のオフネは少し小ぶりです。祭日は8月26日から9月第2日曜日に変更されています。また、両側のハラの部分にはかつては着物をつけていたという話を聞いており、

穂高神社と同じように行われていたようです。

明科の大足諏訪社のオフネも基本的に形は他のオフネと同じです。赤い幕が張られ両側に山の飾りが大きく出ていますが、ここでは下のハラ部分がかたんと小さくなっています。やはり秋のお祭りで10月10日に行われていましたが、現在は10月の第1日曜日になっています。

穂高の矢原神明宮のオフネはコンパクトで可愛いオフネですが、8月25日の祭礼に出されます。両側に幕を張って基本的な形は一緒ですが、前面にススキがたくさん置かれているのが季節を良くあらわしていて特徴的です。

最後に穂高有明立足の諏訪神社のオフネを紹介します。もとの祭日は8月15日でしたが、今は9月第2日曜日に変わっています。形式も他のところと同じで、昭和30年代までは穂高神社と同じように飾りや背景をつけてというようにしていたそうですが、住民が減りオフネづくりが維持ができなくなったため、現在は人形飾りは止めて、周囲にシバを置き紅白の幕を張り添枝を3本のせてススキを置き、前に花を配するというかたちに簡略化しています。花飾りといった形で、やむを得ずというところでしょうか。

祭りに携われる人がしだいに減ってきてしまい、きちんとしたオフネを出すのが難しくなっているところも多いと聞きました。多少形は変わったり省略したりしても、何とかオフネが出せたらいいと思います。

穂高地方のオフネについては、展示でもたくさん紹介されていますのでそちらの方を参考にいただければと思います。

三番目に池田型があります。最初に諏訪型の非常にシンプルなオフネ、次いで穂高神社の華やかな人形飾りのオフネ、そして最後に穂高の北側の池田町では、また人形飾りがなくなっていき幕中心のオフネになります。そこで中心となっているのが池田八幡宮の例祭に出るオフネです。もとも

とは8月15日でしたが、今は9月24日に行っています。

そのオフネの形はというと、基本的には他の型と共通しています。真ん中に四角いヤグラがあって両側に刎ね木を出して、車をつけ、ヤグラの真ん中に松の枝を立てますが、飾りは幕だけです。ただし、その幕は他地域のように単に一重に巻かれているのではなく、たくさんの幕を使用して4重、あるいは5重と何重にもしています。これを真下から見るとよくわかるのですが、幕が中側に幾重にもなっています。つまり、幕飾りを中心しているオフネといえます。幕をいかに綺麗に見せるかと工夫を凝らしたのが池田型の特徴といえましょう。

また、これまで紹介したオフネは外側から見えないように内側に車輪がついていましたが、池田の車輪はヤグラの外側につけ、さらに前の車輪が小さくなっており、形が変わってきています。これも池田型の特徴です。祭りではやはり境内で3周しています。



池田八幡宮のオフネ

池田型のオフネは池田町と周辺部、大町市の南側という非常に狭い範囲に分布しています。池田町堀之内ではオフネを出す祭りが9月13日に行われています。真ん中に松の枝、あとは幕だけという単純なもので、車輪も池田と同じです。また池田町中島のオフネも非常にシンプルであり、鮮やかな色あいの幕が何重にも綺麗にめぐらされま

すが、あとは松の枝だけが出ているだけです。

今度は、いままでのような毎年新しくつくるオフネとは違い、恒久のオフネ、つまり毎年同じものを使うオフネを見ていきたいと思います。

その中心となるのが松本市里山辺の須々岐水神社のオフネです。旧暦6月16日、今は5月5日に彫刻を施した豪華なオフネが出ます。享保11年(1726)にオフネに関する最初の記録がみられます。ということはおそらく17世紀の終わり頃にはすでにあっただろうと思われる。9つの町内からほとんど同じような形のオフネが出ています。

オフネは2階建てのいわゆる山車といってよいもので、前後に刎ね木を出して、赤い幕をめぐらして船形にしてあります。1階は全面が彫刻の施された板で囲われており、中の見えないところに囃子方が乗っています。2階部分は四方吹き抜けですが、多くは中に何も飾っていません。

ここで注意したいのは車輪が二つということですが、中側なのでちょっと見にくいのですが、車輪は二つだけです。ですから曳き手が手を放すとオフネが前後に傾いてしまい、必ず支えていないとまっすぐ立っていないのです。そして船が波に浮かんでいる様子を表わすために、曳いて行く際にはオフネを大きく揺すりながら歩くといいです。



須々岐水神社のオフネ

このかたちのオフネが須々岐水神社の周辺部にたくさん伝わっています。これは松本市小岩井に

ある諏訪神社のオフネも同じように2階建てになっていて、2階部分は吹き抜けです。前後に刎ね木を張り出して、波模様の幕をつけていますが、さすがに山の中なので泳いでいる魚も鯛ではなくて鯉になっているのは納得するところでしょう。同じような形のオフネの例として、松本市島内の大宮神社のオフネがあります。ここでも2階建ての山車の前後に分かれて幕が張ってあり、吹き抜けの2階部分には米俵を積んでそこに御幣を掲げています。基本的に里山辺型を踏襲しています。

なかにはオフネ全体を象らずに、船の後方の部分・艫がなくなってしまう、前の舳先の部分だけを中心につくられたオフネもみられます。豊科の新田神社では4月に例祭が行われていますが、ここでは同じく2階建てになっているものの、後ろの艫側部分が抜け落ちて平らな山車の後ろがそのまま見えています。

あるいはその逆の姿をした山車もあります。つまり舳先にあたる部分がなく、後ろの艫側だけが残っている場合です。松本市北北条の大宮熱田神宮神社では4月29日に祭礼が行われます。前の部分だけみますと2階建てのごく普通の山車で、2階部分には人形飾りがあります。一方、後ろに2本の青竹が張り出され、天井側に幕が張ってあり、その下に囃子方が入って歩きながら演奏します。今まで見ていただいたオフネですと、みな側面に幕が張ってありましたが、ここで船形の艫側だけが残されたというだけでなく、さらに変化して幕が側面ではなく天井側に張られていて、ちょっと面白いかたちに変化しています。

これまで、臨時のオフネが諏訪大社下社のオフネ祭りから始まって穂高に伝わり、さらに池田にまで広がっていったこと、それから松本の方を中心に恒久のオフネがあるというお話をしました。

ところで、最初に諏訪大社には二つオフネがあるといいましたが、これまで話題にしていた下社に対して上社の方でもオフネが御柱祭で登場しま

す。御柱祭は去年終わったばかりですね。上社・下社それぞれ時期が違いますが、上社の方は4月の上旬の3日間に「山出し」といって山から里まで御柱を引き出してくる行事があり、それから5月中旬の3日間に「里曳き」の行事があって、その中でオフネが登場します。これはその時のオフネですが、長さが3間(5.4m)あります。細く裂いた青竹を沢山組んで船形にしてその内側に莫塵を敷き、外側は紫の幕で覆っています。真ん中には細い柱を立て、先端に御幣と薙鎌をとりつけています。薙鎌は諏訪神の象徴といわれている鎌です。このオフネの材料は青竹と莫塵と幕だけですから非常に軽く、何人かで簡単に担げます。

里曳きの初日に、御柱屋敷という場所に休ませておいた御柱が出発すると、途中で上社から迎えに来たオフネと出会い、オフネはそこで向きを変えて御柱を先導して神社に戻ってきます。もともとは御柱の先頭に立って御柱屋敷から一緒にやって来たそうですが、いつの時からか御柱を迎えに行くようになったといえます。かつてはオフネが沿道を進んで行くと、周りから氏子たちが、オフネがいっぱいになるほどたくさんの賽銭を次々と投げ込んだといい、そのためこのオフネを「賽銭船」とも呼んでいました。



諏訪大社上社のオフネ

この上社のオフネも御柱の行事とともに広がっていきましたが、特に長野県東北部、善光寺平の北側を中心に多くみられます。各地に伝播してい

くなかで、オフネは大きく変化していきました。今申しましたように、もともと「賽銭船」といって人々が沿道から賽銭を投げ込んだオフネであったものが、周辺地域に伝わっていくなかで、途中からは「御供船」あるいは「宝船」といって、オフネに人が乗ってそこから御供のお餅をはじめとして、いろいろな縁起物を撒いたりするようになっていきます。かつて賽銭が投げ込まれたのは逆に、今度は御供を撒くように変化しており、多くの地ではこの方式になっています。

なかには御柱の曳行の際に、オフネに直接御柱をのせて、オフネは御柱を曳くためのものだとしているところもあります。また、オフネはもともと御柱祭の時に出されていたのが、毎年行われる例祭に行われるようになり、伝わっていくなかで大きく変化していっています。

中野市上今井の諏訪神社での御柱祭に出されるオフネは御柱をのせて運搬します。台車の上に垂木で船形に仕上げ柴をたくさんくくりつけ、先頭には鶴の飾り物をつけたオフネで、そこに御柱が2本のせられています。ここの御柱は諏訪大社と違って4本ではなく、もともと2本しか建てません。御柱をのせて神社まで曳いて行くのですが、ここでも途中で人が乗って御供撒きが行われています。

上田市には生島足島神社というよく知られた神社がありますが、そこでは4月第3日曜日に御柱祭が行われています。諏訪大社で御柱祭が行われる春には、同じ時期に諏訪地方一帯で諏訪大社の分社だけでなくごく小さな小祠にいたるまで「小宮の御柱」といってみな御柱を建てています。こちらの安曇野地方では御柱はほとんどみられません。諏訪から東北に位置する長野市方面では大変盛んであり、諏訪大社と関係の無いような神社でも御柱祭が行われたりしています。生島足島神社もその一つですが、御柱祭の練り行列に「宝船」と呼ばれる船形の山車が出ます。お正月の宝

船と同じように中に米俵を積み七福神が乗っており、曳いている途中でその上から「御供撒き」といって、縁起物とかお餅とかいろいろなものを撒いています。



生島足島神社・御柱祭

上高井郡高山村の高杜神社の御柱祭でも同じく「宝船」と呼んでいて、御柱の出る練りの行列に従って出され、七福神が乗り込んで各所で御供撒きが行われています。

こういった宝船形のオフネが県北ではあちこちに広がっており、さらには御柱祭から離れて、御柱と関わりのない祭りでも行われるようになっていきました。

長野市七^な二^{にあい}会というところの守田神社では、4月15日の春祭りにオフネが出されます。ここでは御柱祭などではなく、毎年行われる例祭にオフネが曳かれています。ここでも「宝船」と呼んでいまして、二輪のついた台車の上に垂木で船形をつくって当番地区の名前を書きます。この中には米俵が三俵積まれて松枝を掲げ、「宝」と書いた帆を立ててあります。神社まで曳いて来て境内に入ると、ここで「御供撒き」と称してお餅を撒きます。

松本市浅間温泉では「蚕玉祭」といい、神社のお祭りではないのですが、5月1日に養蚕祈願で行われるお祭りです。台車はリヤカーを利用して、その上に垂木で船形をつくって周囲に紅白

の幕を巻いて、中央のヤグラに提灯や花、繭の作り物とか山吹の花などを置いたオフネです。それを子どもたちが縁起物を配りながら村中を曳いて廻っています。

長野県の北のはずれにあり、温泉で有名な野沢温泉村豊郷の湯沢神社では、9月9日に例祭があり、そこで子どもたちによる「宝船」が出るのですが、「宝」の帆をつけただけの鉄パイプ製の三輪車による簡単なオフネになってしまっています。

こうなると最初の御柱祭でのオフネとはかなり実態が離れてしまっています。それでもオフネという形をしっかりと伝えてはいますが、既存の台車を使ったり、リヤカーを利用したりと省力化が進められているようです。

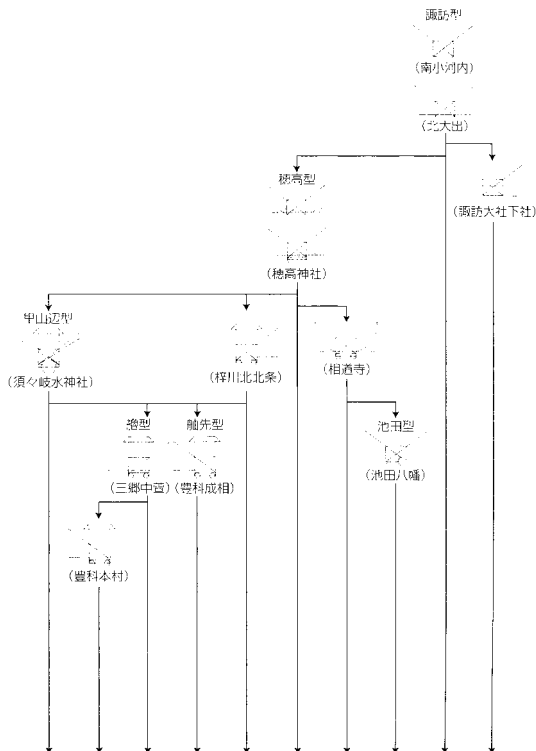
先ほど述べた御柱祭などで七福神などが乗った大きなオフネでは、幕の中を見ると実はトラックだったりする場合があります。オフネの出される機会だけでなく、その形態も大きく変化していったようです。

長野県のオフネについてこれまで簡単にお話してきましたが、お配りした資料に諏訪大社の下社と上社からのオフネの流れを形態の変化を中心に系統的にまとめてありますので、これまでの話の参考にしていただければと思います。

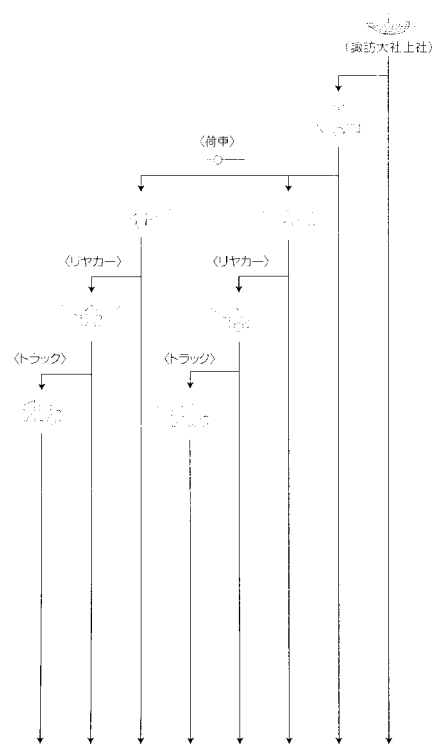
今度はオフネの分布図を見てください。大きく見て下社のオフネ祭りから伝わったと思われるのは諏訪型・穂高型・池田型・里山辺型とあります。最初は諏訪大社を中心に非常に簡素なオフネでしたが、それからしだいに変化していき、穂高神社ではまた違ったかたちで大きく花開き、その北側の池田では再び簡素化して伝承されています。一方、松本では最初に須々岐水神社で立派な彫刻飾りのオフネが出ました。あれだけ立派でお金がかかる山車をつくることのできた背景は、そこが城下町であり商人が経済力をもっていたからです。それだからこ他所とは違う立派なオフネがつけられ、とても一回で壊せるようなものではなく、毎年使うことになるわけです。

それがまた周辺地域に広まっていき、農村部に

諏訪大社下社のオフネの系譜



諏訪大社上社のオフネの系譜



伝わることによって少しずつ変化をして、ついには舳先だけになったり艫だけになったりと形を変えながら伝播していています。

それからもう一つ、上社の方は特に型の分類はしませんでした。オフネの変容が激しく、下社のように類型化が難しいからです。またどちらかという、非常に簡素になる傾向が強かったようです。

上社のオフネの流れをみると、上社から北方、長野善光寺平の方に向かって、さらに県の最東北方までかなり広く分布範囲が確認できます。

分布図でみると下社・上社のオフネの分布範囲の違いがよくわかると思います。なぜこんな風に違うのかという、大きな要因の一つは諏訪大社の勢力圏の問題です。先ほどから諏訪大社は特殊な神社形態をとっていると申しましたが、上社と下社はそれぞれの分社を建てるなどして勢力を広げ、その地域を自らの支配下においてきました。

中世の上社・下社の支配地域をあらわした分布図をみると、その上に上社の流れのオフネと下社の流れを汲むオフネの分布がほぼ重なっていることが注目されます。このことから、上社・下社ともその勢力圏下にある地域にそれぞれのオフネ祭

りを伝えていったと考えられます。つまり、下社がもともと勢力をもっていたところにはこうした下社系のオフネが現在も残されていますし、上社が勢力をもっていたと思われる地域には上社の系統のオフネが残っているのです。

最後に地元の穂高神社の話の一つしたいと思います。オフネの成立について、最初の問題に立ち返って、「なぜこんな山の中でオフネなのか？」という疑問について、一つの見方を示したいと思います。もともと諏訪大社の建御名方命は出雲にいた神様で、大国主命の子どもです。高天原から命を帯びて降りてきた建御雷命に国譲りを迫られた時に、父の大国主命や兄の言代主命はそれを承諾したのに対し、弟の建御名方命だけが反対して建御雷命と勝負をしますが負けてしまいます。そして諏訪まで逃げ込んで「もうここから出ないから許してくれ」と言ったとする神話が伝えられています。

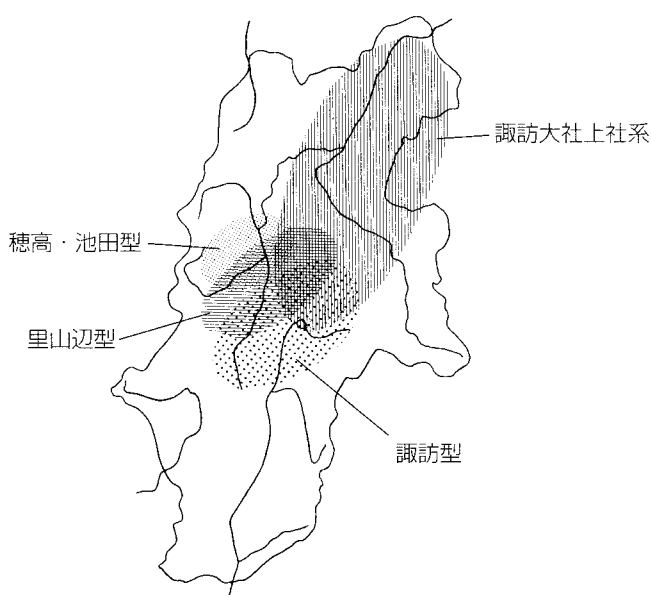
もちろんこれは神話なのですが、もともと出雲系の神がおそらく日本海側をわたって、姫川を遡って諏訪へとやって来たことをうかがわせる伝承といえます。

同じように安曇野でも、その地名の由来とされる北九州の海人族である安曇族の末裔であるとの言い伝えや、穂高神社の祭神が海神・綿津見命を父にもつ穂高見命であることなどもよく知られています。やはり日本海から姫川を通して安曇野に入ってきたといわれます。

これらは伝承世界の話であり、歴史的事実そのものではないかもしれませんが、人なり文化なりが移入されてきた経路が示されていることに変わりはないと思われます。そして、かつては海から入って来たという自分たちの出自を伝える伝承を残したいということがどこかにあったのかもしれませんが。

その具体的な形象として現実にオフネという形をとったようですが、それでも海に浮かべる船と

オフネの分布



はまったく違う形のものをつくり、しかもオフネに不可欠な飾りは山から採ってきた柴なのです。実際、シバブネ（柴船）という名称も多く聞かれます。船にも関わらず山から採ってきた柴をつけるという行為は、おそらく外部から新天地にやって来た人々が柴を新しい地の象徴と考え、海と山の融合を図り、新天地でうまく交わっていきこうとする意図をもっていただのではないかと思います。だからこそ山の中でのオフネだったのではないのでしょうか。

最後に、同じオフネといっても諏訪を中心にしたごく簡素なオフネと比べて、穂高ではとても華やかなオフネに変化しているのですが、その背景について一言触れておきたいと思います。

もともと穂高神社でオフネがつくられるようになったのは、諏訪大社下社の勢力下に入っていた関係でオフネがつけられたのだというのが最初にあります。実際に諏訪大社の影響が強かったことは、中世には南宮御宝殿といい諏訪大社と同じ社殿が存在したこと、遷座祭には御柱建てが行われたこと、実際に中世の境内図には御柱が描かれています。そうしたことからもうかがえます。

それが変わっていく一つのきっかけは、近世になって諏訪大社の影響が減少したことによります。南宮御宝殿も無くなりますし、御柱も建てなくなりました。また遷座祭も、諏訪大社の御柱祭が6年ごとであり、穂高神社でも同じ6年周期で行われていたのですが、途中から20年周期に変わっていきました。20年というのは伊勢神宮の式年遷宮の周期です。おそらく諏訪大社とは別の伊勢神宮の勢力が新たに入ってきて、その影響が大きくなり、しだいに諏訪の支配下から抜け出していったのではないかと思います。

そのひとつの具体的なものとして、オフネの人形飾りがあったのではないのでしょうか。おそらく中世までは、諏訪大社の支配下のなかで祭りもそれに倣って同じように行っていたのが、それまで

の諏訪大社の様式とは違う、諏訪大社の支配下からは抜けるということを強調するために、諏訪大社のオフネとはまったく違う派手で大きな立派な祭りを取り入れていったのではないかと、私は考えております。

その一つのキーワードがよく使われるオフリヨウという言葉です。オフリヨウというのは、地域によって多少違いますが、多くは「オフリヨウを渡す」などといって、旗とかオフネが神楽殿を3周することを指しています。オフリヨウという言葉はいろいろ字があてられていますが、オ（御）は敬意を表す接頭語ですので、本体は風流（フリュウ）であったものが訛ってフリヨウになったと思われる。

フリュウというのは、もともと京都の祇園祭などで鉦や山を煌びやかに飾りたてることであり、それにひかれてやって来た疫神を依りつかせてそのまま街の外へ追い出すためのものでした。

そうした華やかな飾りのことをもともと風流と呼んだのですが、それが言葉とともにおそらく日本海を通じて安曇野にも移入されたのではないのでしょうか。実際、京都の祇園祭にも船形をした船鉦があります。

そしてその流れが安曇野までやってくる途中にもその痕跡がみられます。おそらく京都から北に陸路を向かい、敦賀から日本海に出ることになりますが、能登半島を廻ると七尾があります。そこにはデカ山という有名なお祭りがあり、安曇野のオフネによく似た大きな船形の山車が出ています。船の航海のルートに沿って、他にも同様の船形山車がみられます。

もちろん安曇野のオフネは京都の船鉦とは大きく違ってはいますが、風流という精神は受け継がれています。穂高神社のオフネの両側を華やかな晴着で飾るのは、祇園祭の船鉦のような舶来の豪華な絨毯をかける代わりとして、自分たちでできる精一杯の豪華な金襴の衣装をかけたことの名残

なのではないでしょうか。

オフリヨウは、華やかな人形飾りによって神霊を寄り付かせて降ろす行為として定着した言葉なのでしょう。そうすることによって、穂高神社を中心とする安曇野では自分たちの道を歩んだのではないのでしょうか。

急ぎ足でお話してまいりましたので、端折った部分もあり、分かりにくいところもあったかと思いますが、諏訪大社を源流とし、安曇野で大きく花開いたオフネについてお話させてもらいました。山の中に出現する大きなオフネはとても魅力的です。これからも信濃各地で伝えられていくことを望んで、お話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

安曇野と道祖神信仰

倉石忠彦 (國學院大學名誉教授)

皆さんこんにちは。ただいまご紹介をいただきました倉石です。博物館の展覧会「安曇野のお祭り展Ⅱ～よろず願いごと引き受けます～道祖神～」の一環として企画されましたシンポジウム「道祖神が拓く安曇野の未来」の前座として、安曇野と道祖神との関係について、いただきました時間内で少しお話したいと思います。よろしく願いいたします。

安曇野にお住まいの方にとりまして「安曇野」や「安曇野の道祖神」は身近な存在ですから、よくご存知であろうと存じます。したがって、長野市生まれの私が勘違いしていることがあるのではないかと存じます。そうした点につきましては、後ほどご指摘いただきたいと存じます。わずかな時間ではありますが、まず日本の伝承文化から見た安曇野の位置を確認し、次に道祖神信仰の概要について触れ、最後に道祖神がいかに地域興しに関わることができるかについて考えてみたいと思います。

1 伝承文化としての安曇野の位置

それではまず安曇野の位置について、伝承文化のありかたから、幾つか確認しておきたいと思います。安曇野と呼ばれる地域は、ふつう、旧南安曇郡を中心とする地域を指しますが、北安曇郡の一部をも含む場合があります。この地域はご承知のように、飛騨山脈(北アルプス)を背にしております。その山々を水源とする幾つかの川は、千曲川の支流である犀川に流れ下り、複合扇状地を

つくっています。こうした扇状地は豊かな耕地となって、長野県の穀倉地帯を形成しています。アルプス風を避けるために家々は屋敷林に囲まれておりまして、清冽な流れを利用して山葵畑を営み、また養蚕も盛んでした。そして日本でも数少ない天蚕を飼育する農家が今も見られます。近年は住宅地が造成されて、耕地は少なくなってきましたが、まだまだ残された自然の多い豊かな田園地帯です。

こうした自然環境にあります安曇野は、東西を境する山脈に接しているとともに、日本海や太平洋と距離を置いています。しかし日本海に流れ込む大河である信濃川(千曲川)の支流犀川や、峠を挟んではいますが木曾川・天竜川・姫川など、日本海や太平洋に至る河川の上流部に位置し、また塩の道といわれる千国街道や、中山道・北陸街道を結ぶ交通路の要衝に位置し、古くから周辺地域との交流が盛んでした。つまり安曇野地域は、東日本と西日本との境界に位置して、様々な文化が行き交う文化の十字路であり、交差点であったのです。それは東西南北の文化が交流し、複雑に重なりあって、独自の地域文化を形成するところです。ですから安曇野は、文化の重層性がより濃厚なところであるといえることができます。

安曇野地域がそうした伝承文化の東西を区画する位置に存在することを、具体的に示したのが図1「民俗の東西区画線」⁽¹⁾です。それと共にこの地図は、東西区画の境界線が一様ではないことをも示しています。民俗文化の東西区画線は直線的に

(1) 倉石忠彦「民間伝承の分布から見た内陸文化の性格」『内陸文化研究』第1号 2001年

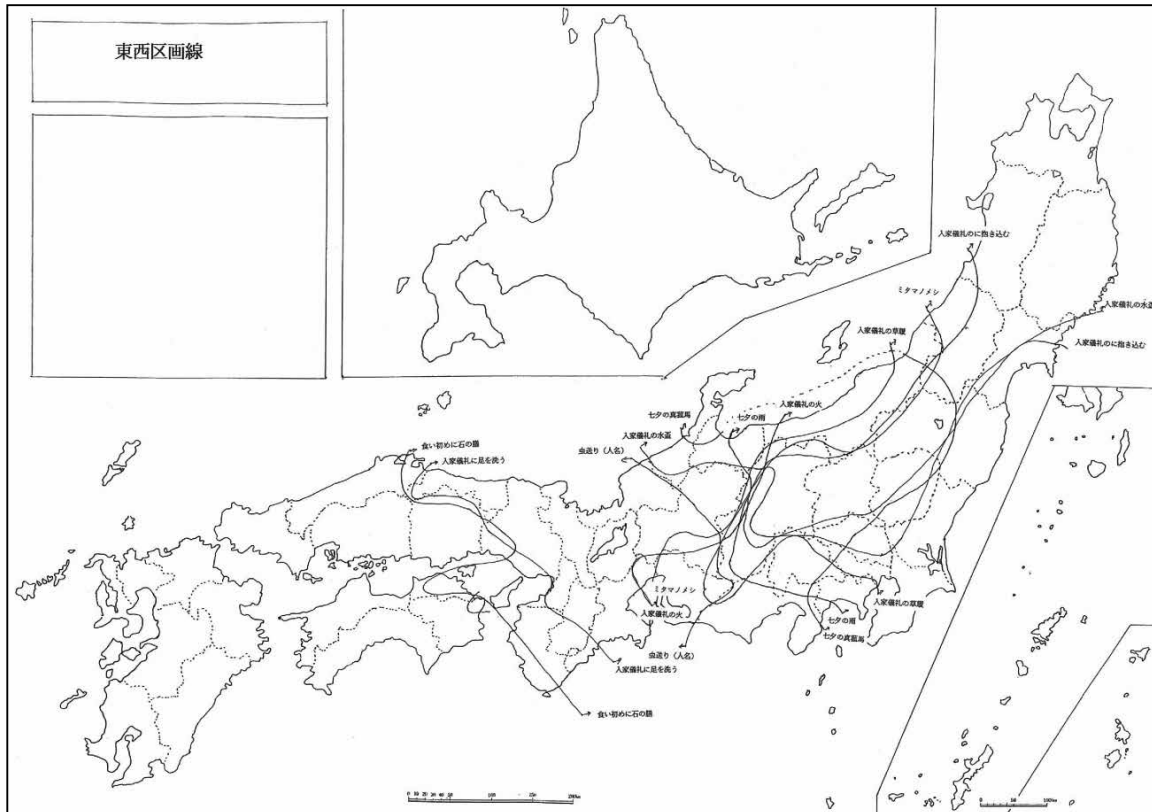


図1 民俗の東西区画線

日本列島を横断するのではなく、内陸的文化、沿岸的文化のありかたにより、その境界は大きく変化しているのです。そして安曇野は内陸的文化の真ただ中に位置すると共に、本州中央高地における民俗文化の東西区画線を形成する地域の西端に位置していることを示しています。

しかもこの本州中央高地を中心とする内陸地域は図2「民俗分布圏図」に見られますように、他と異なる伝承的な民俗文化を持っている地域でもあります。少なくともここに取り上げたような道祖神関係や、カニドシ・半夏生^{はんげしょう}・七夕などの年中行事、あるいは雪隠参り・初誕生などの人生儀礼は、長野県を西端として内陸に分布している儀礼です。

長野県内におけるこうした民俗文化の分布圏を、『長野県史 民俗編』の資料を用いて作ってみますと、図3「長野県における民俗文化圏図」⁽²⁾

のようになります。これによりますと長野県を水源とする千曲川水系流域・天竜川水系流域・木曾川水系流域などに分布圏が構成されていることがわかります。安曇野はそれらの川の上流域の交点の位置にあり、犀川の上流域の文化が分布する地域ということになります。つまり、安曇野は内陸部であって、日本海沿岸・太平洋沿岸地域の影響を受けながらも、独自の伝承文化を形成してきた地域なのです。

2 道祖神信仰の概要

安曇野には双体道祖神碑が多いことでも知られていますが、「道祖神」の信仰についてははっきりしていることはそれほど多くはありません。その理由の一つは「道祖神」とされている神の名が、どこでも・誰でもが使っている呼び名ではないからです。もともと民間で使われてきた神の名は漢

(2) 長野県『長野県史 民俗編』5巻14冊 1984～1991年

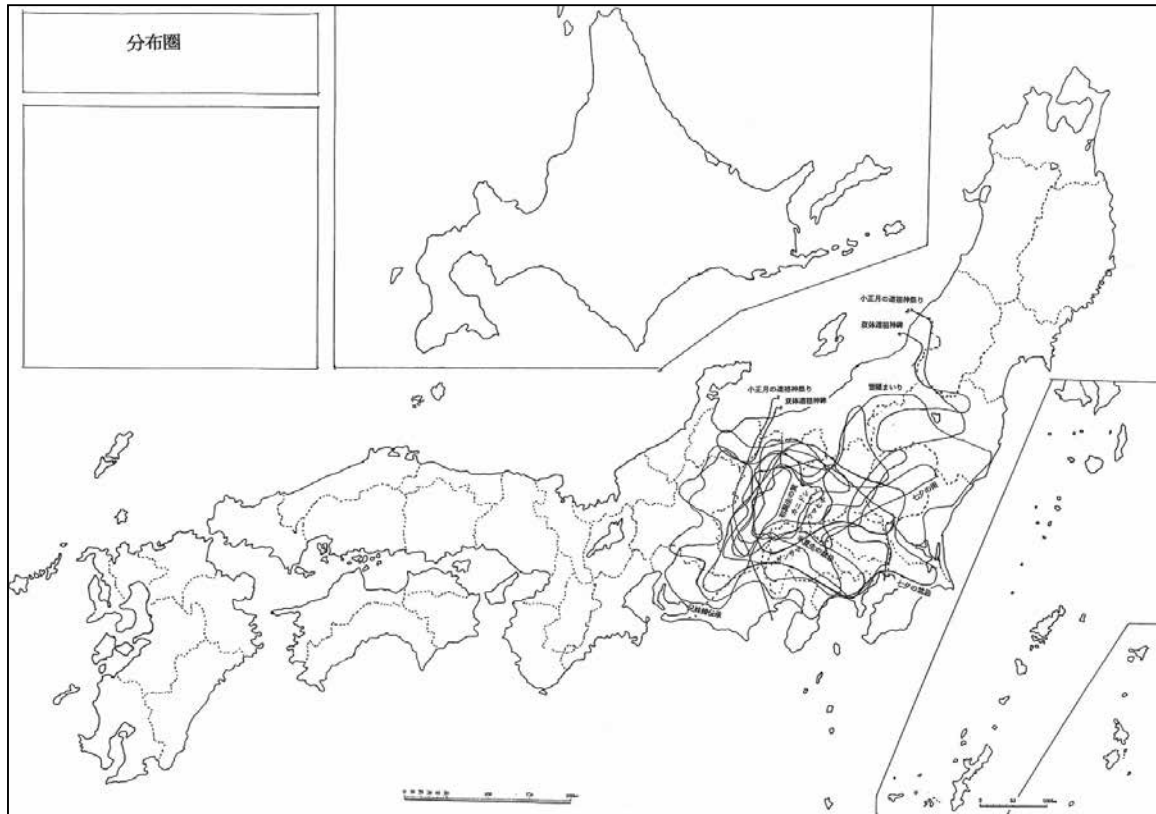


図2 民俗分布圏図

字で記されることは少なく、ただ神の名を呼ぶだけであることが普通でした。「道祖神」にかかわる漢字表記が文献で確認できるとされる『倭名類聚抄』⁽³⁾においても、神の名は漢字で記されるとともに、その呼び方である和名でも記されていますから、古くは漢字表記でなかったことを示しています⁽⁴⁾。しかも、『倭名類聚抄』には「道祖 和名佐倍乃加美」と漢字二字表記であって、「道祖神」と漢字三字表記では記されていません⁽⁵⁾。ただ、それより150年ほど後に成立した『今昔物語集』には、「道祖」「道祖の神」「道祖神」の三つの表記がみられます⁽⁶⁾。それでもなお『和名類聚抄』の和名のように、いずれの表記をもサエ(へ)ノカミと読ませようとする跡が見えます。ただ「道祖神」

と、漢字三文字表記が定着してきますとそれを音読みして、ドウソジンと読むことが多くなったようです。ここにほぼ道祖神・ドウソジンという神名が一般化する契機があったと考えられます。

こうして成立した道祖神は、多くの民俗神のように言葉・行為・感覚・形象などによって、常民の間に世代を超えて伝承されてきたのではなく、知識人の手が加わって形成・伝達されてきた部分⁽⁷⁾が大きいといえます。それだけに在地で伝承された民俗事象と、知識人の流布した知識との間にはかなりの差異が存在しています。したがって、「道祖神」「道祖神信仰」の範囲についても、伝承地や伝承者によって必ずしも一様ではありません。ただ、それにしても「道祖神信仰」と

(3) 『倭名類聚抄』源順編 承平年中(931～938年)成立

(4) 例えば、「道祖 和名佐倍乃加美」「岐神 和名布奈止乃加美」・「道神 和名太無介乃加美」中田祝夫解説『和名類聚抄』(元和三年古活字版二十卷本)勉誠社 1978年 12頁

(5) 「道祖 和名佐倍乃加美」中田祝夫解説『和名類聚抄』(元和三年古活字版二十卷本)勉誠社 1978年 12頁

(6) 「天王寺僧道公、誦法花救道祖語 第二四」(『今昔物語集 三』、『日本古典文学大系』第24巻、岩波書店、1961年) 252頁

(7) 倉石忠彦『道祖神信仰の形成と展開』大河書房 2005年

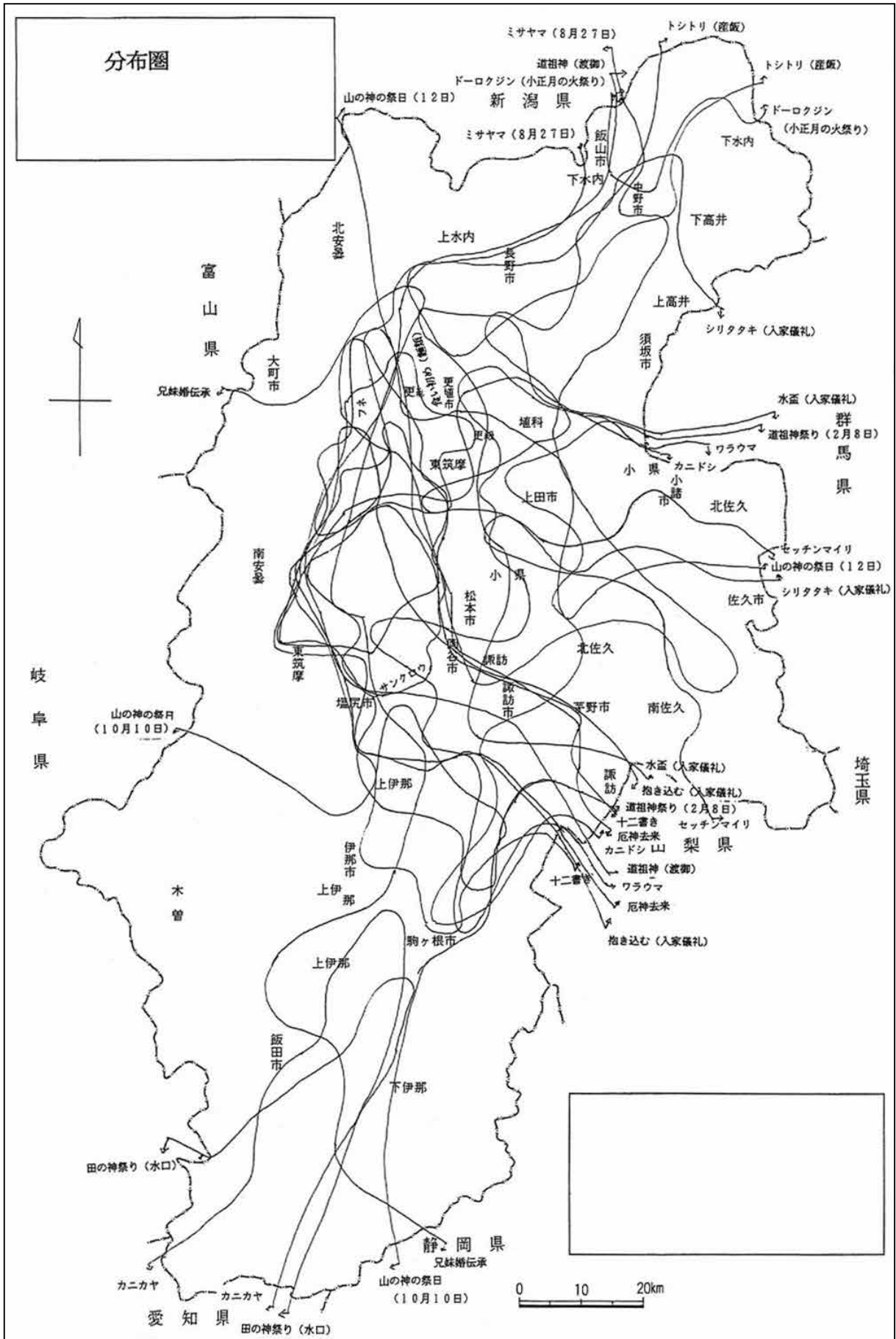


図3 長野県における民俗文化圏図

いうからには、「信仰」が存在するはずで、しかし、信仰というのは心の問題ですから、目などで確認することはできません。そこで人々が認識できる文化事象としての、信仰対象が必要となります。それを物体として作り出したのが、道祖神碑であり、道祖神場などという、信仰対象物あるいは祭祀対象地です。そうした信仰対象としての存在は、個人の認識にとどまる限り特定の名称は必ずしも必要はありません。しかし多くの人とそうした信仰や信仰対象物を共有する場合には、それを認識し合うために信仰対象としての神の名が必要になります。それが「道祖神」だったのです。

この道・祖・神という三つの漢字によって表記される神を、現在では当然のようにドウソジンと呼んでいます。しかし伝承地における伝承者たちは、必ずしもドウソジンと呼んでいるわけではありません。私の生まれ育った長野市の近郊農村では、「道祖神」と刻んであるにもかかわらずそれをドウロクジンと呼んでいました。安曇野市豊科では、ドウソジンと呼んでいるのを聞いたことがあります。近代学校教育の普及に伴い、誰でも漢字を読むことが出来るようになりました。その結果、伝承的な呼称に基づくのではなく、碑に刻まれた漢字を音読し「ドウソジン」と呼ぶことが多くなったのだと思われます。かつては漢字表記とは別に呼び方が地域ごとに存在していました。しかし、道祖神という表記が普及すると共に、現在では全国共通語としてドウソジンという呼称が多く用いられるようになりました。

そうした道祖神の祭りの儀礼（祭祀儀礼）は、籠り・神迎え・神送り・供物・共食・神意を問うという要素で構成されています。つまりこれらが道祖神祭りの要素儀礼なのです。こうした様々な構成要素のどれを強く意識するかによって、行事

の呼び名が変わってきます。安曇野地方にも様々な呼び名がありますが、神迎えのしつらえであるオンバシラ・ブテン、神送りの儀礼である火祭りの呼び名であるサンクロウ・ドンドン焼きなどがそれです。東信地方では供物・共食にかかわる2月8日の儀礼をハツウマあるいはウマヒキと呼んでいます。こうした道祖神祭りの呼称は、いずれも道祖神にかかわる構成要素の呼び名です。このように構成要素儀礼のうちもっとも強く意識される儀礼の呼称をもって、道祖神祭りを代表させているのです。こうした要素儀礼を、私どもは統合要素儀礼と名付けています⁽⁸⁾。

もともと大和言葉でサヘノカミと呼ばれていた神に、いったん「道祖」あるいは「道祖神」という漢字が当てられ、ドウソジンと音読みされるようになりますと、その表記された漢字が大きな力を持って独り歩きするようになります。手元にある漢和辞典を引いてみますと、「道」には、「道路・道の神・道の神の祭り・道理・技芸・思想」という意味があり、「祖」には「先祖・親・規範・道の神の祭り・死者を送る・旅立つ人を送る」という意味があるとされています⁽⁹⁾。サヘノカミの機能として、このような漢字の意味が加えられてきます。つまり、都の知識人の関与により、実体的伝承からの遊離が起きてくるのです。さらにそうした新知識は全国に広がり、それを受容した地域において、道祖神信仰の習俗化が起きます。単に新しい知識を受け入れただけではなく、従来から行なわれていた儀礼などに取り込まれて、新しい習俗となります。伝播と伝承、在来文化との習合などによって、地域的差異も生じてきます。もっとも、こうした変化の実態についての検証は、まだ十分にできているわけではありません。しかし、「道祖神」表記とその音読みであるドウソジン呼

(8) 倉石忠彦『道祖神と性器形態神』岩田書院 2013年

(9) 貝塚茂樹他編『角川漢和中辞典』角川書店 1959年

称、そしてその信仰内容の多様化は、このように理解することによって説明することができる、私どもは考えています。

こうして、中世に出現した道祖神信仰が全国に伝播し、地域的な伝承と習合したとすれば、その痕跡が残されているはず。その痕跡の一つが道祖神の呼び名です。実はこの言い方は大きな矛盾を含んでいます。或る神を認識し、その神を他の神と区別するのが、神の名前のはずなの。神の名前が異なるのに、同じ神であるということはどういうことか、という問題があるから。しかし現実にはサイノカミ・ドウソジン・ドウロクジン・サヤノカミ・サヨノカミなど異なる呼称で呼ばれる神であるにもかかわらず、それらはいずれも「道祖神」として扱われています。そして、図4「「道祖神」関係呼称分布図（日本）」に示しましたように、それぞれの呼称の分布地域がかな

り明確です。それは同心円の分布をなす伝承事象は、外円の事象ほど古い事象であるとする、周圏論的な観点からすれば、まずもっとも古くサイノカミ呼称が伝播した後に、ドウロクジン呼称が、そしてサヤノカミ（サヨノカミ）呼称が伝播したものと解釈できます。

なお、この分布図にはドウソジンという呼称は取り上げられていません。それは分布図を作るための報告書などの資料には「道祖神」と漢字表記されることが多く、それが様々な呼称に当てた表記であるのか、それともドウソジンという呼称を示す表記であるのか明確ではなかったために、除外せざるを得なかったのです。

それでは長野県内の呼称分布の状況は、どのようになっているのでしょうか。図5「長野県道祖神関係呼称分布図」をみますと、その呼称の分布域はかなり明確です。サイノカミ呼称は全県的に

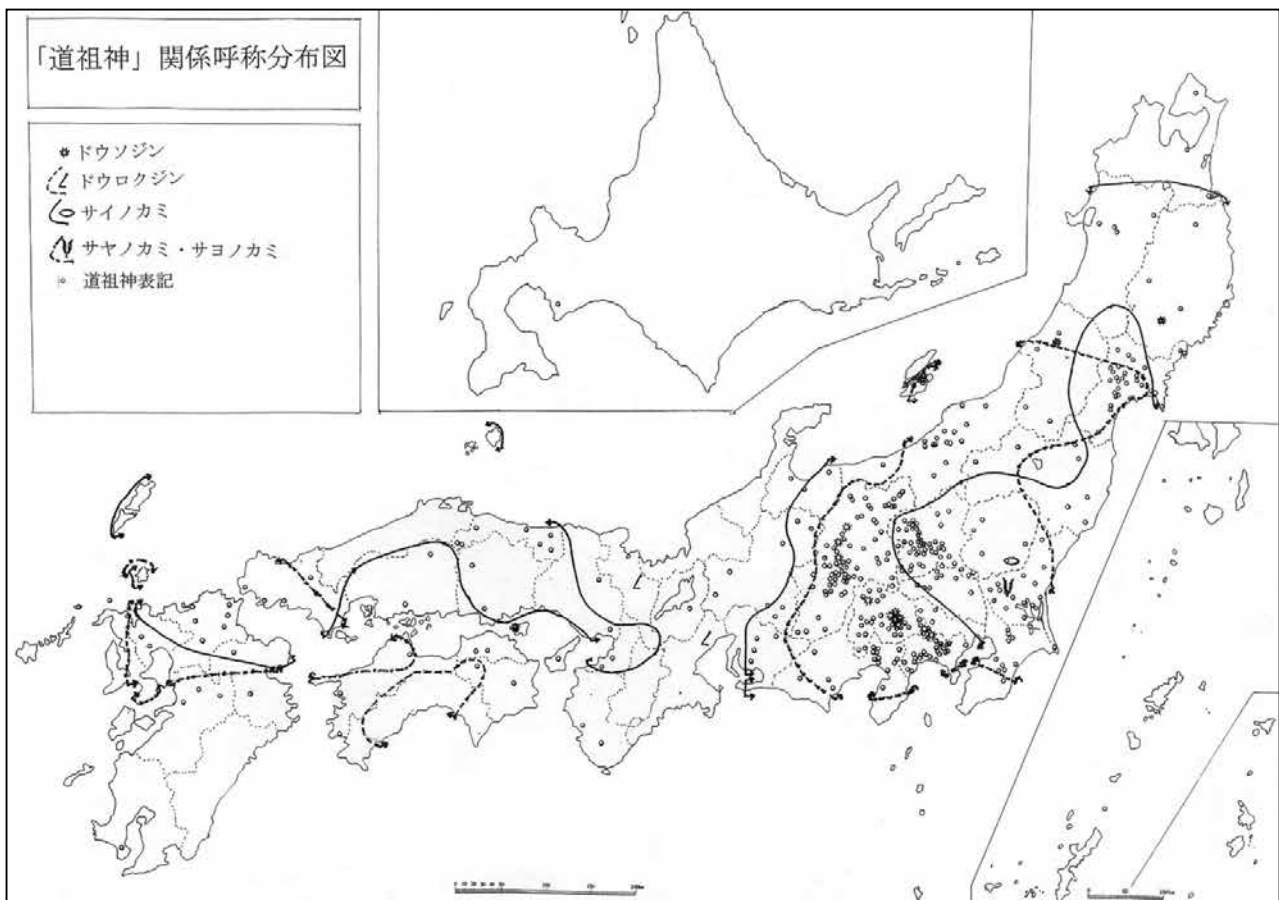


図4 「道祖神」関係呼称分布図（日本）

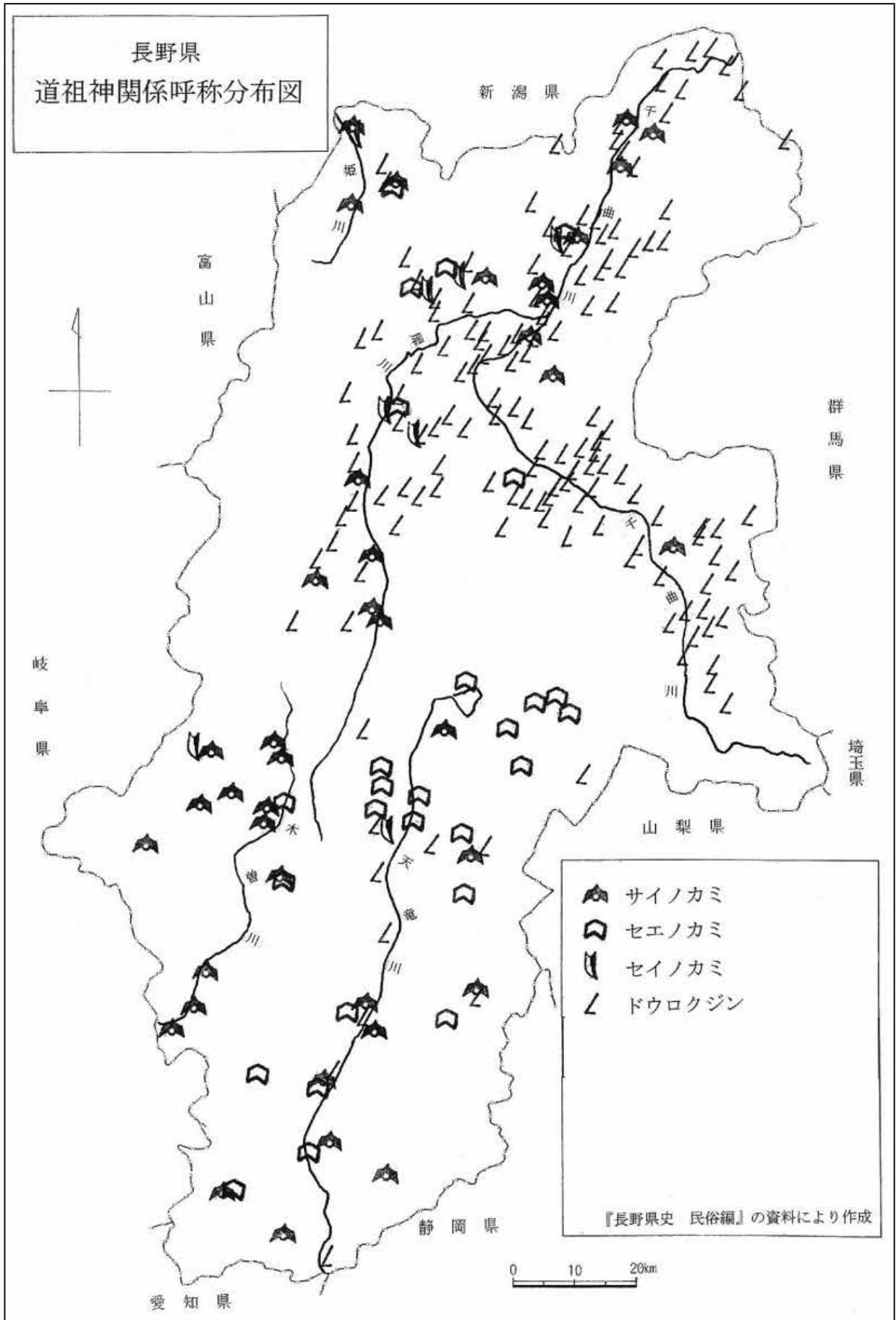


図5 長野県道祖神関係呼称分布図

分布しており、千曲川水系域にはドウロクジン呼称が分布しています。ただ、その支流である犀川下流域にはセイノカミ呼称が、天竜川水系域にはセエノカミ呼称が分布しています。サイノカミ・セエノカミ・セイノカミの関係はよくわかりませんが、ドウロクジン呼称はどうかや新潟県から千曲川水系域に伝播してきた可能性が高いと思われます。セエノカミとセイノカミとは、サイノカミの変化語でしょうからドウロクジン呼称の伝播後にできた語の可能性が高いと考えています。

こうして多様な名前と呼ばれている、いわゆる道祖神の信仰対象とされるものも、一様ではありません。文化庁の作った『日本民俗地図』をもとに作り直しました図6「道祖神祭神形態分布図」を見ますと、文字碑・双体像碑などの石碑、単体

丸彫像などの石像、丸石、樹木などを祭祀対象としています。図には示しませんでした、このほかに性器形態造形物、奇石、あるいは形のあるものは祀らないが、特定の場所に道祖神がおられるというところもあります⁽¹⁰⁾。これらのうち、分布地域が比較的明確なのが図に示しましたように、丸石と双体像碑・単体丸彫像です。丸石は全国に点在していますが、特に山梨地方に濃密です。双体像碑は本州中央部に集中していますが、山陰地方などにも分布しています。

もともと他の所と違った特別な気配などを感じるところに、独特な力の存在をイメージし、それが形をとったものが祭祀対象物であると考えられています⁽¹¹⁾。したがって祭祀対象物は神名や像容を刻んだものでなくてもかまわないし、石や木で

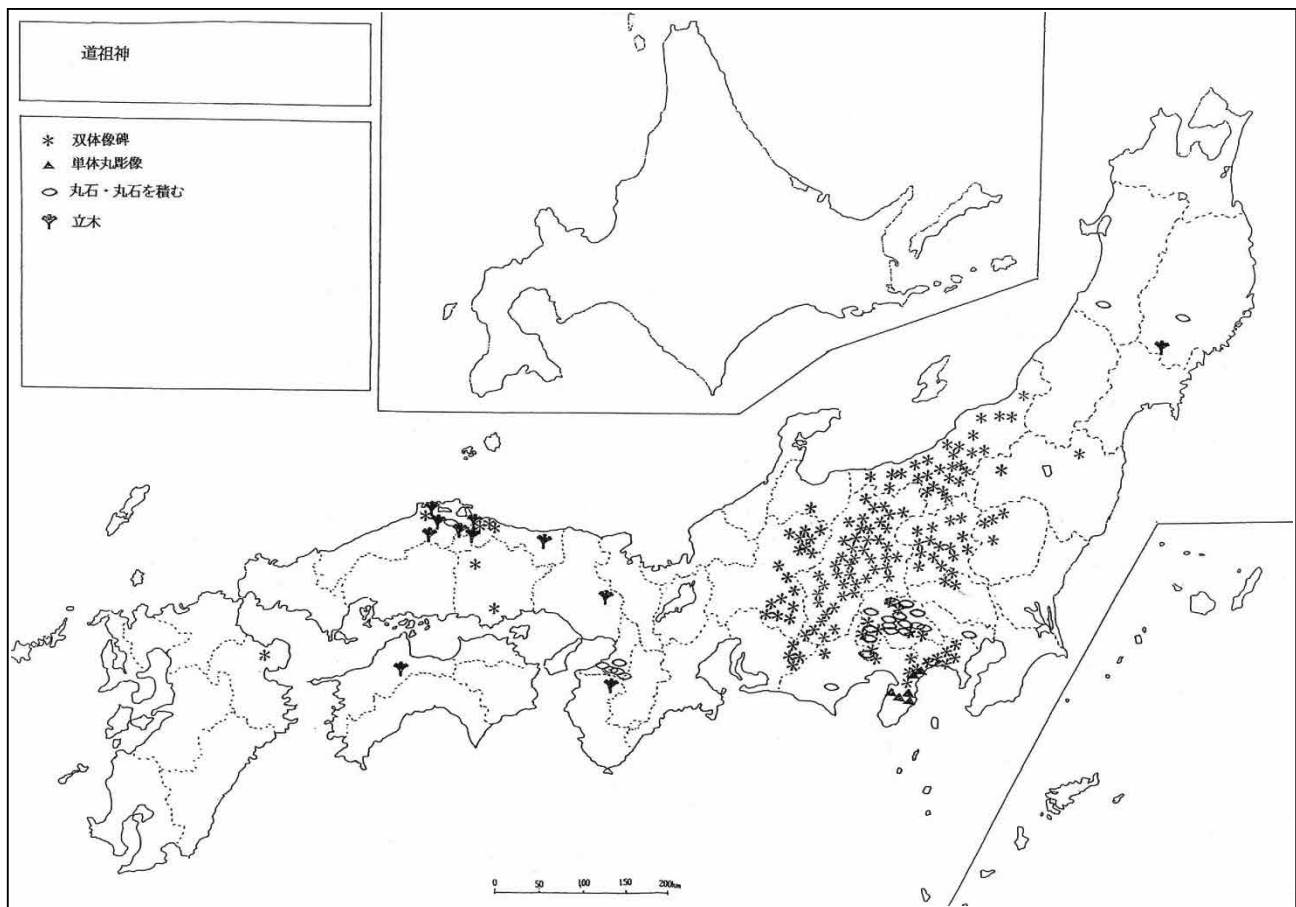


図6 道祖神祭神形態分布図

(10) 「67、道祖神（形式）」、文化庁編『日本民俗地図 Ⅲ（信仰・社会生活）』（社）国土地理協会 1972年

(11) 山折哲雄「日本の神」山折哲雄編『日本の神』1 平凡社 1995年

あっても何か他と異なる感じを抱くことができるものであれば、何でもよいわけです。そのうち人の形にイメージしたものが神像です。それが一人であれば単体像であり、二人であれば双体像の形をとることになります。そうした形態に地域的な差異がみられるということになりますと、その地域の文化と深くかかわってイメージされているということが考えられます。そこに道祖神信仰にかかわる問題として、なぜ道祖神が男女双体の神と認識しなければならなかったのかという問題が生まれてくるのです。それは研究者としての問題だけではなく、いったん男女双体像が成立し、その理由が忘れられてしまうと人々もそれを問題とし、祭祀起源伝承を伝えはじめるのです。その代表的なものの一つが、兄と妹が兄妹であるにもかかわらず結婚してしまったという、兄妹婚伝承で⁽¹²⁾す。

ともかくこうして、中世にサヘノカミの漢字表記として生まれた「道祖」は、「道祖神」表記となり、その道祖神信仰が全国に伝播するにしたがって、それぞれの地域の習俗を取り込み、多様化するとともにますます信仰内容は肥大化し、複雑化します。その結果現在では、道祖神は最も理解しにくい民俗神の一つになってしまいました。その道祖神信仰のありかたをできるだけ理解しやすいように整理してみたのが、図7「道祖神信仰系統樹」です。⁽¹³⁾この系統樹は、「道祖神」と漢字三字で表記される神の呼称と機能とを取り上げて、その展開を一本の樹木の形態に整理することにより、道祖神信仰の展開とその全体像を概観しようとしたものです。幹は「道祖神」信仰の伝承的展開過程を示し、枝は呼称と機能内容とを示し、それぞれその先端にあるものほど系統的に新しいものを示しています。系統樹の、根元から梢に至

る樹木の姿は相対的な時間的変化の様を示していますが、これを上から見下ろしますと、地上にその枝などが重なって投影された状態で伝承されていることを表わすことになります。つまり、その信仰内容・形態が幾重にも重なっている様や地域差として伝承されていることを示すことになるのです。実はそうした地域差や、世代差として伝承されている道祖神信仰を、立体的に構成し直したのが、この道祖神信仰系統樹です。

枝のところどころに寄生木がついていますが、これは伝承的な道祖神信仰の要素ではなく、学者や研究者たちの理解として示されたもので、伝承的文化に付与されたものであることを示しています。そうした知識人の解説が、道祖神信仰という伝承文化に、ある程度の影響を与えています。また、系統樹をめぐって幾つかの円が描かれていますが、これは機能や神像のイメージと呼称や機能との関係を表わしています。これを見ると縁結びの神や境界の神・村を守る神の信仰を取り込みながら、いかに多様な内容が次々と加わり、幹を太らせながら、複雑化していったかが理解できるのではないかと思います。ただこれには、多くの問題が残されています。特に性の神・境界の神・村を守る神などの信仰をなぜ取り込むことになったのかという理由などは、いまだ明確ではありません。こうした問題を含め、道祖神信仰の持つ諸要素を樹形で理解しようとするなどについて、これからさらに整備されなければならないと思っています。

3 安曇野の道祖神

それでは、こうした道祖神信仰と安曇野という地域とはどのようにかかわっているのでしょうか。まず道祖神の祭日について整理してみます。

(12) 倉石忠彦『道祖神信仰論』名著出版 1990年

(13) 前掲註8 207頁

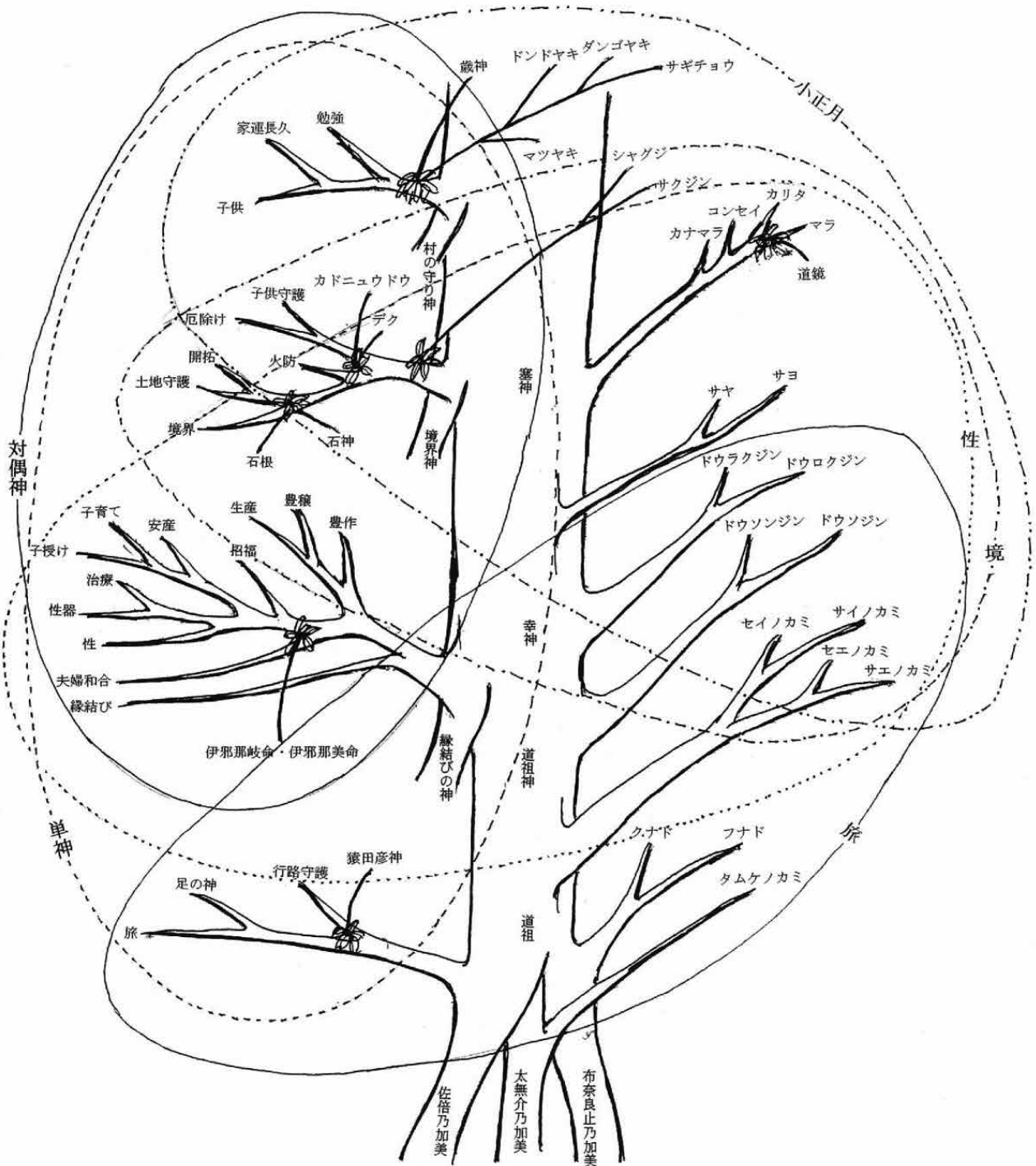


図7 道祖神信仰系統樹

1970年代に調査した『長野県史 民俗編』の資料によって作ったのが、図8「道祖神の祭日分布図（長野県）」です。これを見ますと、祭日は1年中に及んでいます。そのうち小正月に道祖神の祭りが行われるとするのはほぼ全県にわたりますが、南信方面は空白になっています。これは道祖

神を祭らないのではなく、特に祭日が定められていないということです。小正月以外の祭日として、2月8日は東信地方・諏訪地方・松本平、7・8月が安曇野です。この年頭ではない時期に行われる道祖神祭りの存在は、特徴的です。もう一つ安曇野で特徴的なのは、小正月以外に元旦にも道

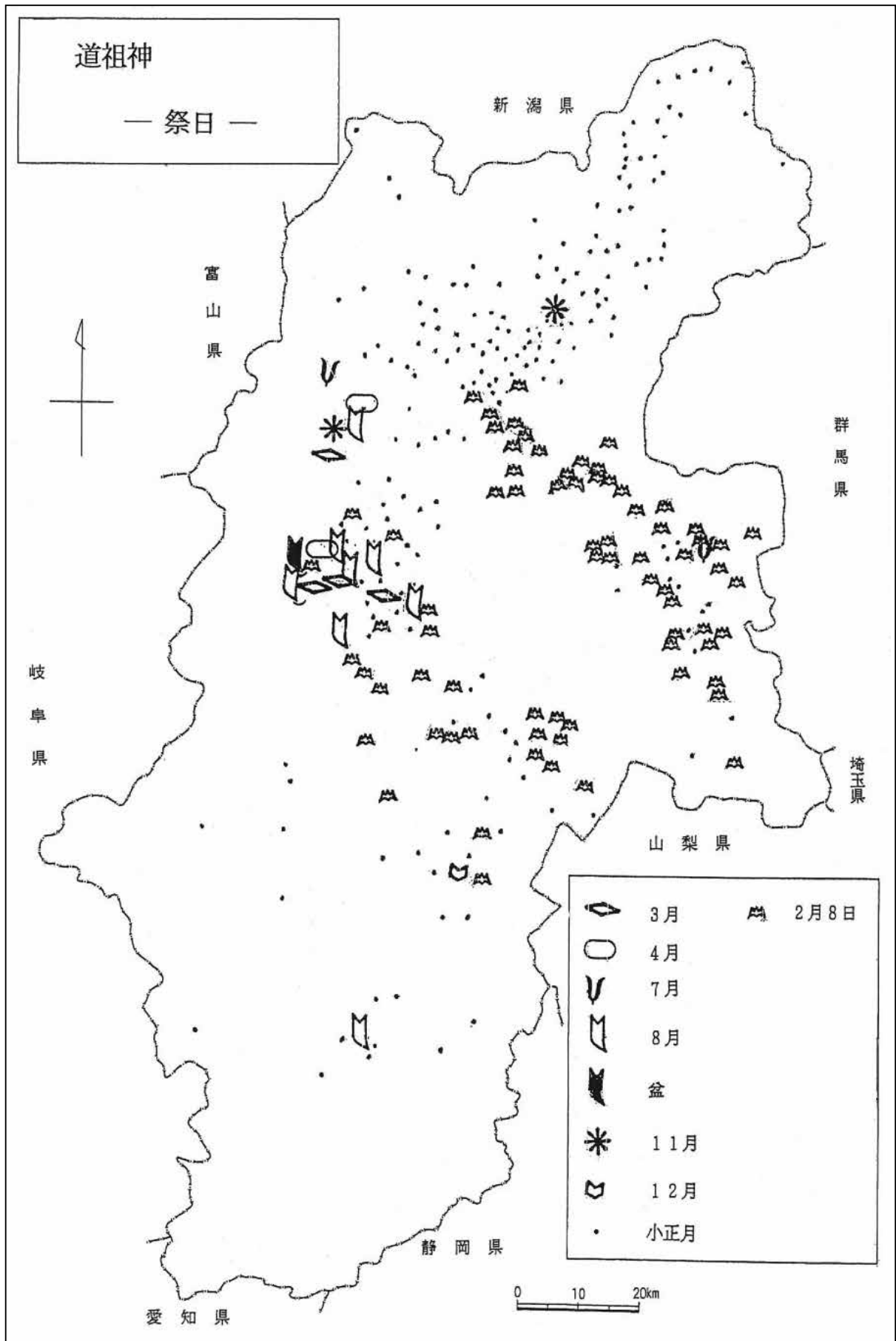


図8 道祖神の祭日分布図（長野県）

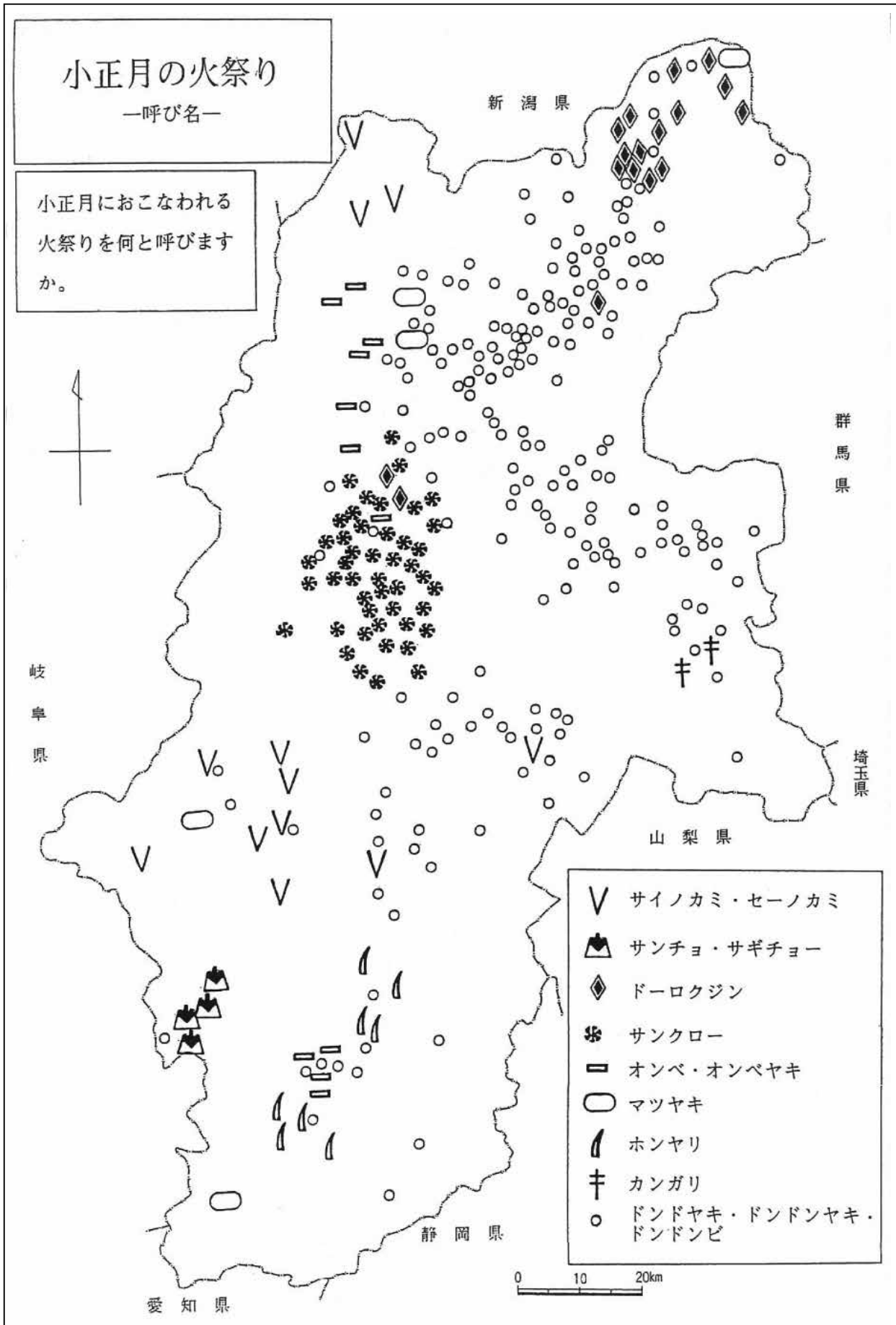


図9 長野県・小正月の火祭り呼称分布図

祖神の祭りが行われることです。元旦に立てる御柱を道祖神の祭りであるとしている所は安曇野全域に見られますが、安曇野市豊科高家などでは子供たちが木像の道祖神像をもって「ご年頭」の挨拶に家々を回っています⁽¹⁴⁾。元旦と小正月の両度にわたって道祖神の祭りが行われているのです。

小正月が道祖神の祭りの機会であるというところでは、小正月に行われる火祭りがその祭りであるとしています。図9「長野県・小正月の火祭り呼称分布図」を見ますと、小正月の火祭りの呼称に地域的差異がみられます。千曲川下流域・犀川上流域ではドウロクジン、木曾川上流域・姫川流域ではサイノカミとかセエノカミとかと呼んでいます。つまり道祖神の呼称がそのまま火祭りの呼称となっているのです。旧松本藩域などではこの火祭りをサンクロウと呼びますが、これは道祖神の呼称とは考えられていません。ただ、サンクロウは道祖神の祭りと考えられてはいます。このサンクロウという呼称は全国的に見ても特異な呼称ということが出来ます。

次に安曇野における道祖神像ですが、男女双体像が多いとされています。そこで試みに、安曇野市の穂高地区と、近隣の朝日村、そして他地域の長野市を取り上げて、その祭祀対象物の像容の割合を整理してみますと、表「道祖神像の形態」のようになります⁽¹⁵⁾。こうしてみますと、穂高地区は石造物 3088 基の内、道祖神碑は 186 基で、全石造物に対する道祖神碑の割合は 6%です。そのうち双体像碑は 65.6%を占めています。朝日村は石造物 1014 基の内、道祖神碑は 31 基で道祖神碑の割合は 3.1%です。そのうち双体道祖神碑は約 87%を占めています。旧長野市は石造物 9631 基の内、道祖神碑は 494 基で、全石造物に対する道祖神碑の割合は 5.1%です。文字碑は 330 基で全道祖神碑に対する割合は 67%です。双体道祖神

碑は 86 基で 17%、性器形態石は 50 基で 10.1%、自然石は 28 基で 5.7%です。性器形態石と自然石を合わせますと 78 基で 15.7%に相当します。

つまり、道祖神碑における双体像の割合の最も大きいのは朝日村の 87%、穂高地区は 65.6%でこれに次ぎますが、全石造物中に占める道祖神像の最も多いのは穂高地区ですから、個体数は朝日村よりも多くなります。長野市は全石造物中に占める道祖神碑の割合は 5.1%で、朝日村より多いのですが、その 67%が文字碑です。双体道祖神碑は 86 基と個体数では朝日村より多いのですが、その割合はわずか 17%です。そのかわり特徴的なのが性器形態石の存在です。自然石の具体的な形態はよくわからないのですが、あるいはこれらも性器形態をとっているのかもしれませんが。そう考えますとそれが 15%前後もあることとなります。ともかく、穂高地区では双体道祖神碑の個体数が多く、そのうちの幾つかは彩色されます。これも特徴の一つということが出来ます。

安曇野地域でも、オンマラと呼ぶ男根形の性器形態石が祀られている所がありますが、それと道祖神とは区別されているようです。性器形態石を道祖神とはしていませんし、石碑型の双体道祖神の像容にしても、あからさまな性的表現をとるのはほとんど見られません。こうして性的要素の少ないことも、安曇野の道祖神信仰の特徴一つといっていいいでしょう。もちろん長野県下における道祖神碑に刻まれた像容は様々で、男女双立像や祝言像と呼ばれる盃を持った男神と徳利を捧げる女神像、あるいは男女交合の姿を刻んだ像も見られます。また石碑形の道祖神だけではなく、木造単体丸彫の道祖神像や双体の木造丸彫の道祖神像があります。さらに性器形態石を道祖神として祀っているところもあります。そうした様々な道祖神の形態が見られるのですが、安曇野の道祖神

(14) 『ふるさと安曇野 きょう あした』第10号 安曇野市豊科郷土博物館 2013年

(15) 前掲註8 352頁

表 道祖神像の形態

年号	安曇野市										東筑摩郡朝日村										長野市・旧長野市・城									
	道祖神					神					道祖神					神					道祖神					神				
	双体像 合掌 男女像	不明	小計	文字碑	小計	其他	合計	石造物	双体像 男女像	文字碑	道祖神	道録神	合計	石造物	双体像 合掌像 男女像	文字 碑	道録神	道祖神	道録神	合計	石造物	双体像 合掌像 男女像	文字 碑	道録神	道祖神	道録神	合計	石造物		
1110~	1		1			1																								
1390~						0																								
1640~						0																								
1650~						0																								
1660~						0																								
1670~						0																								
1680~						0																								
1690~						0																								
1700~						0																								
1710~						0																								
1720~						0																								
1730~						0																								
1740~						0																								
1750~	2		2			2																								
1760~						0																								
1770~						0																								
1780~	1		1			1																								
1790~	2		2			3																								
1800~	6		6			7																								
1810~	5		5			6																								
1820~	6		6			9																								
1830~	5		5			11																								
1840~	10		10			11																								
1850~	8		8			12																								
1860~	13		13			16																								
1870~	2		2			6																								
1880~	3		3			4																								
1890~	3		3			4																								
1900~						2																								
1910~						1																								
1920~	1		1			3																								
1930~						0																								
1940~						0																								
1950~						0																								
1960~						0																								
1970~						3																								
1980~						8																								
1990~						2																								
不明	1	40	2	43	29	29	2	74																						
合計	1	119	2	122	62	62	2	186	3088	27	3	1	31	1014	4	82	86	303	8	4	13	2	330	2	48	28	28	494	9631	
対石造物%	0.03	3.9		3.9		0.9		6	100	2.6	0.3	0.1	3.1	100	0.04	0.9	0.9	3.1	0.08	0.04	0.1	0.02	3.4	0.5	0.3	0.8	5.1	100		
対道祖神%	0.5	63.9		65.6		33.3		100		87	9.6	3.2	100		0.8	16.6	17	61.3	1.6	0.8	2.6	0.4	67	10.1	5.7	15.7	100			
対双体像%	0.8	100								100					4.8	100														

【徳高町の石造文化財】 徳高町教育委員会 1994年
 【朝日村石造文化財】 朝日村教育委員会 1978年
 【長野市の石造文化財】 第1集~第4集 長野市教育委員会 1978年~1981年

は非常に行儀がよく、たとえ盃と徳利とを持つ男女であっても、せいぜい手を握る程度であって、性的表現としては極めて抑制されています。

こうしてみますと、安曇野の道祖神の祭りの特色の一つは、元旦・小正月・2月の初午や夏にも行われるというその祭日の多さにあります。正月の道祖神祭りは元旦のオンバシラ・ご年頭と小正月の火祭りが主なものであり、初午に甘酒を供えるところがあります。これは他地域における2月8日の習俗やウマヒキの習俗と関係するものでしょうが、安曇野における変容の一つと理解することもできましょう。夏の道祖神祭りにはブテンと呼ばれる山車を作ったりひきまわしたり、七夕と関わらせたりしています。道祖神が男女双体であることを、七夕伝説と関係づけて説話化されているのは既に近世初頭に見られますが⁽¹⁶⁾、こうした夏の道祖神祭りは、安曇野地域の道祖神祭りの大きな特色です。また、多様な行事が通年にわたって子供組の活動として営まれていることも特徴的で、三郷地区の道祖神祭りが県の無形民俗文化財として指定されたのも、そうしたことが評価されたからでした。

4 道祖神の姿

安曇野の道祖神を他の地域と比較して、その特徴を見てきましたが、それでは道祖神は石像として石碑に刻まれたものだけなのかといいますと、必ずしもそうではありません。単体の木造道祖神というのがあります。口絵写真3は大町市借馬の道祖神です。しばらく前までは8月7日に祭られていました。この像は中世の道祖神像と共通する形態をもっているようです。これはそれぞれ地域ごとの子供組の親方の家で一年間祀りまして、7日の祭りの時に持ち寄って、かなり大きな祭場を作って祭ります。写真1は、この木像の後ろに掛

けられている掛図ですが、この道祖神は双体です。つまり単体の道祖神の後ろに、双体の道祖神が祭られています。でも、ぜんぜん違和感なく人々は祭っていました。ここでは、単体だろうと双体だろうと、道祖神であればいいということのようです。

写真2は、長野市戸隠の木造の男女双体の道祖神です。小さな木の祠に入れて祀られています。

写真3は、伊豆伊東市にある丸彫単体の道祖神



写真1 双体道祖神画像
(大町市借馬 平成12年)



写真2 木造双体道祖神座像
(長野市戸隠上野 昭和54年)

(16) 例えば、『曾我物語』巻第二（『日本古典文学大系』第88巻 岩波書店 1966年）116頁

石像です。ここでは単体の道祖神を二体並べて祀っていました。

写真4は、自然石の性器形態物ですが、こうしたものは全国各地にあります。いままでは男根とか女陰とかと呼ばれてきましたが、民間伝承には実際に身体部位としての男根、女陰を出して神に捧げる事例があります。ですから、そうした生身の男性性器、女性性器ではなくて、石であるということを確認するために、私どもは性器形態石という呼び名で呼ぼうとしています。これは長野



写真3 単体丸彫り道祖神座像
(静岡県伊東市 平成10年)



写真4 女陰形態道祖神
(長野市篠ノ井上石川 昭和50年)

市篠ノ井上石川にあるものですが、女陰形態石です。

口絵写真4は、京都の^{いずもじさえのかみしや}出雲路道祖神社の境内に祀られている古い石の神体です。右の木の祠は厄神社の祠ですが、左の猿田彦命とされる石の神体はどう見えるでしょうか。見る人によっては男根形に見えるのではないのでしょうか。この神社は中世の文献にはよく出てくる有名な縁結びの神なのですが、その神体としてこういうものが道祖神として祀られていました。

写真5は松本市内田で新しく作られた道祖神碑ですが、いわゆる松本の民俗面、道神面の一つを模しています。鼻が男根で、その下が女陰ですから、これは男女交合の図ということになります。

この様なものの他、新しいものがあります。写真6は東京渋谷のセンター街近くの道端にあるものです。盛り場ですから若い人たちが大勢この前を通っていきませんが、誰も見向きもしません。だから絶対に渋谷では道祖神は観光資源にはなりえないのです。しかし逆に写真7は松本市今町の人たちが、観光資源として作り出したものです。今



写真5 道神面道祖神碑
(松本市北内田 平成3年)



写真6 盛り場の双体道祖神碑
(東京都渋谷 平成15年)



写真8 七夕飾りと双体道祖神碑
(安曇野市豊科北村 平成8年)



写真7 新しい双体道祖神碑(松本市今町 平成10年)

町にはこうした、新しく作った道祖神碑がずらっと並んでいます。こういう新しい形態の道祖神碑があります。

それに対して写真8、9、10が安曇野のものになります。写真4、5などと比べていかに行儀がいいかわかりと思います。写真11、12は、つい最近作られた橋の袂に置かれたものです。それから写真13は新興住宅地の入り口に建てられたものです。手を結ぶ、という共通点が見られ、ほとんど同じような形に作られています。要は道祖神の像容は、安曇野のシンボルキャラクターと



写真9 彩色された双体道祖神碑
(安曇野市穂高神田町 平成8年)

いってもいいものになっているわけです。男女が手を握っていますが、これはむしろ性的なものではなくて、地域社会の絆を重視するという象徴的なポーズであろうと思います。



写真10 双体道祖神碑
(安曇野市穂高 平成16年)



写真11 新しい双体道祖神碑
(安曇野市穂高 大橋の袂 平成15年)



写真12 新しい双体道祖神碑
(安曇野市穂高 大橋の袂 平成15年)



写真13 新興住宅地入口に立てられた双体道祖神碑
(安曇野市穂高有明 平成15年)

5 安曇野の道祖神の現在と将来

安曇野の道祖神祭りの特色は、双体道祖神碑が多いということだけではなく、いままでご説明してきましたように夏の道祖神祭りが行われること、そこではブテンが巡行したり七夕の時に祀られたりするという、それから正月の道祖神祭りにはオンバシラとか火祭りだとか、あるいは初午の時にお祭りが行われ、いずれも子供組の活動であることなどです。

こうしたことなどにより、安曇野は「道祖神の里」だと言われます。しかし「道祖神の里」という評価は外からはられたレッテルを追認しただけです。道祖神だけがそこに孤立している訳ではありません。道祖神を中心とする地域文化があったわけです。渋谷センター街裏の道祖神碑は、安曇野の道祖神碑と違って、いかに場違いな感じがするかということを考えてもわかりますが、安曇野の豊かな自然の象徴のひとつとして道祖神碑はあるわけです。つまり道祖神像という一つの文化事象が、自然と一体化しているわけです。そこで地域興しとしての道祖神を考えるためには、どういう自然の中に、どういう道祖神碑があって、それを育む「道祖神の里」とはどういうものか、ということをもう一度認識しなおす必要があります。そして安曇野の「道祖神」文化についての理解を

深める必要があります。当然これは調査、研究し、それをもとにして周知、啓蒙する必要があるわけです。そのうえで「道祖神文化」というものを活用しなければいけないということになります。それをどのようにして具体化するか、どういう形で展開していくか、というのは余所者の私が言うことではなくて、この安曇野に生活の本拠を持つ皆さん方が今後考えていかなければならない問題ではないかと思います。私などはそれについての一つの見方を示すにとどまる、ということです。

安曇野にある道祖神像は、先に述べましたように非常に行儀がよく、過剰な愛情表現をとっておりません。古典的な服装の立像の男女が、手を結ぶ姿が最もよく見られる姿です。盃と徳利を持っているものもありますが、ほとんどは男女が対等の形で並んで立っています。しかもその男女の髪の毛の状態や衣服の裾は左右対称になっており、その点でも男女平等なのです。見ようによっては男性の方がやや肩身が狭いようにも見えるほど、女性がその存在を主張しています。群馬県六合村の道祖神像のように堂々と愛の営みを行っている像と比較してみますと、慎ましやかで物足りない程です。それだけに、女性が自己主張をすることが認められた現代の男女関係を示しているようで、誰にもつけいる隙を見せない像の姿であるといえます。こうした像容は現在でも次々とつくられる道祖神像にまで引き継がれ、地域観光のためにキャラクター化された姿ともなっています⁽¹⁷⁾。その男女が並んで手を握る姿は、道祖神の愛にかかわる機能に結ぶ性格を付与したものであり、それは地域社会のきずなを重視するとともに、他地域からの不特定外来者を迎える観光地として開かれた地域において、誰とでも手を握る神でなければならなくなったことを示しています。こうした姿は、

安曇野の方々が新しく発見した道祖神の姿です。

このような新しい道祖神像が類型化し、均一化して次々と建てられ、さまざまな形で商品の包装やデザインに「双体道祖神像」が用いられているということは、すでに道祖神は安曇野のシンボルとなっているということでしょう。それは安曇野の方々が、安曇野における道祖神像の価値を発見したということでもあります。ただそれが単に売れるからというだけの認識によっているのか、それとも安曇野を郷土として認識した上での行為であるかということはまた別問題です。

観光客が多く訪れ、土産物が多く売れるという事実は、確かに望ましいことです。しかし、だから道祖神は地域興しに役立っているというだけでは、道祖神は道具としてその外形だけを利用されているにすぎません。そうして利用されているのは、文化事象としての道祖神ではなく単なるデザインであり、そうした意味では、各地に作られているいわゆる「ゆるキャラ」やミッキーマウスなどと、同等の存在であるということになってしまいます。「地域興し」という言葉の生まれた経緯はともかく、表現自体からすれば、「地域興し」とは「地域の持つ力を鼓舞し、奮い起こす」ということでしょう。そうした「地域の持つ力」を奮い起こすことが必要な理由は、その地域の力が衰えてきたからだという認識があるからだと思われます。現象としては人口の減少や商店街の疲弊、経済活動の衰退などということでしょうが、その結果地域の経済状態が悪化し、豊かな生活が実現できないため、その状態を何とか改善する必要があるために、地域の活性化とか、地域興しの必要性とかが叫ばれるようになったのでしょうか。

それでは、「地域興し」をして実現しようとする「豊かな生活」とは、どのような生活なのでしょうか。もちろんそれは経済的な豊かさ、物質的な

(17) 前掲註8 322頁

豊かさは必要でしょう。しかしそれだけなのでしょう。2011年に放映されたNHKテレビ朝の連続ドラマ「おひさま」の前半に描かれていた安曇野の生活は、現在の生活と比較すると、物質的には貧弱でした⁽¹⁸⁾。しかし、主人公を中心とする3人娘は言うまでもなく、飴屋の夫婦などの生活は本当に貧しかったのでしょうか。ブータンにおける満足度は、経済力によっているだけではありません。それでは、「豊かな生活」とはどのような生活なのでしょう。安曇野に生きる人々はどのような生活を望んでいるのでしょうか。それは、「奮い起こすべき地域の力」のありかたと深くかわっているのだらうと思われま

す。地域の持つ力についての認識は人ごとに異なるのでしょうか、その力とは民俗的・伝承文化的に言えば、土地の霊力の事だと思われま

す。古い言葉で言えば地霊の力ということです。土地の霊力が衰弱したため、生活も衰弱したと考えるのなら、鼓舞し、発揮させる衰えた地霊の存在を発見し、認識することがまず必要になるはず

です。土地の力の存在を認識するというこ

とは、地域のありかたを見直すということです。地霊は目に見えませんが、長年にわたって作り上げてきた地域文化こそが、地霊の具体的に発揮された事象ではない

でしょうか。つまり、地霊の力が私たちの生活を支え、地域の文化を形作ってきたはず

なのです。

北アルプスの麓の地域だから、ヨーロッパアルプスの麓にあるような建物を作れば地域の力を認め、地域の持つ力が発揮されたというようなことではないはず

です。そうしたものは借りものであり、安曇野にとってはまがい物です。いくら立派そうに見えても本物ではないのですから、借りものは本物に勝つことはできません。土地の力を発揮させたことにはならないのです。安曇野にある本物の存在を認めることが、土地の力を認識する

ことになり、それによってこそ郷土への愛着・帰属意識を高めることになるはず

です。NHKの朝の連続ドラマ「あまちゃん」では、繰り返し、繰り返し「北三陸がどこよりも良い」と主張して

いました⁽¹⁹⁾。それは安曇野でも同じことです。つまりそれは、土地に生かされ、土地とともに自らが存在しているという認識に基づいた主張

なのです。それは地域が築き上げた文化に対する信頼でもあります。土地の力、地霊の力を信じているということです。それが結局、郷土への愛着・帰属意識を高めることになるはず

なのです。

それでは安曇野地域において地霊の発現として認識し、活用すべき地域文化にはどのようなものがあるのでしょうか。それこそが、地霊によって生かされた地域の人々が発見するものです。ただ発見することは容易ではな

かろうと思ひます。博物館はそのために中核的な役割を果たさなければなりません

が、さらに地域文化発見のための研究センターの様な施設が望まれます。そうしたところで、道祖神や天蚕・山葵など、安曇野の伝承文化について研究し、地域の力と魅力とを広く理解してもら

うための啓蒙活動をする必要があるのではない

でしょうか。出版活動や情報の発信も必要であろうと思われま

すが、それらが地域興しのための基礎作業です。それをふまえて実際にどのような方策があるかが、具体的に考えられるのであ

らうと思ひます。衆知を集めてできるだけ効果的な方法を考

えていくことが、地霊の力を喚起することになるはず

です。

道祖神も必ずやその一翼を担ってくれるはず

です。

時間の配分が悪くて十分なお話ができませんでしたが、以上をもちまして私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

(18) 「おひさま」、NHK、連続テレビ小説、第84シリーズ、2011年上半期放映。主演、井上真央

(19) 「あまちゃん」、NHK、連続テレビ小説、第88シリーズ、2013年上半期放映。主演、能年玲奈

学校と連携しながら進める展覧会事業 ～若年層開拓に向けた博物館の取り組み～

逸見大悟 水谷優美 宮本尚子 百瀬新治

はじめに

安曇野市豊科郷土博物館(以下『博物館』と略記する)は平成24年4月1日をもって豊科文化財団(現安曇野文化財団)指定管理から安曇野市直営となりました。以来館活動を推進していく中で、市内各小中学校の児童生徒が多数来館し利用する博物館の実現という大きな課題に直面しました。直営化以前における市内小中学生の来館者総数が100名程という実情を改善しようと、館職員一同は様々な取り組みを実践してきました。平成25年度の重点であったその活動の実際と結果について、特別展『安曇野のお祭り展Ⅱ』に焦点を当てまとめます。

一 確かな手応えと新たな問題(昨年度の姿)

若者層の博物館的施設利活用については、日本博物館協会で研究委員会を設置し課題と対策を検討した経緯⁽¹⁾がありますように、展示公開施設にとって積年の重大かつ解決の難しい課題となっています。博物館にとっても、市内小中学生など若者が足を運ぶにはどうしたら良いかは、直営化する以前からの懸案でした。また、安曇野市において、公立の博物館・美術館を無料としたり、豊科郷土博物館から各校への働きかけを進めても、実際の効果となっていないのが現実でした。

24年度博物館を引き継いだ時からの、若年層来館者増加への具体策として、

- ① 当館キャラクターがわかりやすく話しかけ

る小学生を対象とした展示解説の改善

- ② 小学生を対象に展示資料に関する宝探し形式でのクイズの新規作成と記念品贈呈

- ③ 市内全小学校3年生がすべて体験する移動博物館形式『昔のくらし体験教室』開設

等々を順次企画し実施しました。保育園児にオフネ祭りの体験イベント参加を呼びかけたり、地域で取り組む子ども祭囃子に博物館行事への出演を依頼したりしてきました。



写真1 昔のくらし体験教室

その結果として、各学校への出前授業に参加した小学生の総数が1300名を上回り、個人あるいは団体で入館した小学生数が前年度実績の3倍以上となる330名という成果となりました。親子でクイズに取り組み、記念品としてのオリジナルポストカードを受け取る姿が目立って多くなってきていたのが昨年の博物館でした。

一方で課題も改めて浮かび上がってきていました。一つには、中高生の来館は相変わらずきわめ

(1) (財)日本博物館協会『中学生・高校生の博物館の効果的利用プログラム開発』(2005)

て少数で、もっとも厳しい年齢層に対する有効な働きかけについて、具体的な方向を見出し得ませんでした。もう一つは、増加したとはいえ小学生の来館者は市内全児童数に対して数パーセントにとどまる点です。出前講座等で博物館と関わりを持つ児童は大きく増えていることから、それをテコに来館者増に結び付ける取り組みが具体的な課題となった昨年度でした。

二 学校に御柱が立った！(取り組みの実際)

本年度新たに進めた若者が博物館に足向ける課題解決の取り組みについて、特別展『安曇野のお祭り展Ⅱ～よろず願いごと引き受けますー道祖神～』を例にして、4つの具体的な活動の姿を通して述べていきます。

まず活動事例となった特別展の内容等についてその概略を説明します。

平成24年度より文化庁の補助事業⁽²⁾として、安曇野の祭りに焦点を当てた展覧会を構想し実施してきました。初年度は安曇野を代表する祭典としてオフネ祭りを取り上げ、次年度の本年は同じく安曇野の特徴的な道祖神祭りを材料に展示を企画してきました。

市内各地には安曇野に多く見られる石造双体道祖神碑をはじめ500体以上の道祖神が立てられ、



写真2 みんなで立てる御柱(豊科北小)

時節を追って様々な祭りが行われています。この祭りが守り継がれてきた歴史や祭りに込められた願いなどを展示紹介するなかで、祭りに興味を持ってもらい、さらに参加を促し地域活性化につながるねらいとしました。そのため祭りを体感的に味わってもらう展示の工夫や、市民参加型のイベント企画を重視した展覧会実現に努めました。

企画にあたっては、遊びや娯楽の要素が強いお祭りをテーマとすることから、小学生を中心とする子どもたちを観覧対象として定め、展示内容やイベントを具体化していきました。取り組みが効果につながるには学校や保育園との連携協力が不可欠と考え、直接訪問して依頼内容を詳細に説明するなど働きかけを強めました。その中で、児童や園児のみなさんに実際に参加体験できる以下のイベントが実現しました。

1 道祖神に色をぬって願いごとをしよう！

(小学校児童を対象に)

穂高地域を中心に、冬の終わりから早春にかけて石造双体道祖神碑の色塗りが行われています。農業の豊作や家内安全を祈り、主に子どもたちが主体となって進める道祖神祭りですが、この行事を子どもたち対象の展覧会関連イベントに位置付けたいと考えました。

実際に子どもたちが色ぬりをする場面を展示紹介し、穂高を中心に伝承してきた行事の意義と願いの成就に向けた色ぬり作法を具体的に明らかにしました。それによって、子どもたちの道祖神に色を塗ることに対する興味関心が高まり、色塗りによって自己の願いを実現しようとする意欲が高揚していくことをねらいました。さらに、博物館職員が小学校へ出前授業に行き、道祖神について説明するとともに、地域で読み聞かせ活動を行っている団体に依頼して、出前授業に参加してもら

(2) 「平成24年度文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」、「平成25年度文化遺産を活かした地域活性化事業」とともに文化庁



写真3 道祖神民話読み聞かせ（三郷小）

いました。道祖神に関わる民話を読み聞かせることで、視覚や聴覚を通したわかりやすい学習の機会を設けました。

この上で、ぬり絵用の道祖神イラストを館職員が作成し、自分の願いごとを書き添えられるスペースを入れたチラシを印刷して、学校・園を通して希望家庭に配布しました。取り組み当初は、限られた学年や学級を単位とした参加希望に止まっていたのですが、マスコミを通してぬり絵企画のPRが広がるとともに、取り組みたいという申し出が増え、個人や大人にまで広がりました。

小学生向けのかわいらしい道祖神のイラストを主体として、各個人の願いが込められたぬり絵作品が続々と博物館に届けられ、最終的な集計では総数1069人の参加という成果につながりました。一部は展示会場に展示し、残りの作品は館内の壁面を利用し掲示して、応募の道祖神ぬり絵すべて



写真4 小学生のぬり絵作品

を紹介できました。工夫のこらされた色塗りも見ごたえがありましたが、「大きくなったら〇〇になりたい!」「夏休みに△△をやり抜きたい」「病気のお祖父ちゃんが早く元気になりますように」等の様々で個性的な願いごとも多く、それを楽しみに観覧する来館者が目立ちました。

応募してくれた園児・児童の家庭では、家族みんなで来館して本人の作品を観覧し、認めほめてもらう姿が多く見うけられました。展覧会期間中の小学生以下の来館者数は250人近くに達しました。運動会等の行事が多く長期休みなどの無い時期の取り組みとしては博物館の予想よりも手ごたえのある結果が実現できました。



写真5 ぬり絵作品展示風景

2 学校内で地域の御柱立てを体験しよう!

(各学校と地域の祭り団体を対象に)

元旦などから道祖神の傍らに立てられる御柱は、神さまの降りてくる柱を華やかに飾りたて、新しい年の平穏無事や五穀豊穡を祈る、道祖神祭りの一つとも考えられています。松本平に特有な正月行事とされており、御柱立ての風習は安曇野から松本・塩尻にかけて点在しています。ただし、近年の安曇野では、長大な柱を立てることの難しさや祭りをを行う後継者不足等で、この伝統的な行事が消失してしまった場所が目立ち、存続していても将来継続していくか危うい地区の多いのが現状になっています。

大空に色彩鮮やかな柱を立てていく御柱祭りは、子どもたちにとって具体的でわかりやすく、地域学習としての教材に向いていると博物館では考えました。また、多くの手で飾り物を作製し力を合わせ巨木を立てる活動は、地域のきずなや団結の大切さを体験的に学ぶ学習が期待できるととらえ、学校での御柱を立てる活動を提案しその導入を呼びかけました。御柱という伝統行事の学習と参加体験を通して、故郷や歴史に目を向け地域への愛着を深めたり、伝統文化としての意義や重要性を理解し継承していく態度を養うことができる等々、説明に付け加えつつ企画案を作成しました。

学校に向けての直接的な働きかけは、祭りを主催団体や地域との関係を踏まえ、校区内に御柱行事が存在する小学校に的を絞りました。タイミング良く展覧会の期間中に各校の運動会が実施されるので、保護者をはじめ学校関係の多くの方に参加し見ていただけることのできる絶好の機会になるかと予想しました。また、保護者や児童が活動により参加しやすくなる夏休みが含まれるよう、展覧会開催前から御柱を立てる取り組みを進めていきました。

しかし、いざ学校内での活動を始めるとなると、スムーズに事が運ばず解決の必要な課題が生じてきました。まず、伝統行事であるとともに信仰的側面もある道祖神祭りを、学校の学習活動に持ち

込むことへの是非が問題となりました。学校・博物館・祭り主催者などのうち、実際に活動を計画し指導する際の役割分担をどのようにするか、学習成果や責任との関係で論議調整しました。校内に高い柱を立てることから、活動や展示にかかわる安全確保が大きくクローズアップされ検討を重ねました。検討協議が進む中で、この地で守り伝えられた伝統文化を次の世代である児童に引き継ぐ重要な意味を確認し合い、各立場での工夫や歩み寄りで取り組みが具体化されました。

7月から、道祖神祭りや御柱の意味や歴史について、地域の願いや伝承していくことの意義を含め学習が進みました。9月に入るまでには、多くの児童の手で御柱の飾りが作成され、みんなで力を合わせて飾りつけを終えました。運動会の数日前、祭り関係者をはじめ地域の方の手をお借りして、御柱が安曇野の大空にゆっくりと立てられました。御柱は1週間から1か月の間立て続けられ、運動会当日来場された方はもちろん学校周辺を通りかかった大勢の人たちが、実際の御柱をカメラに収めたり触れたりする姿が随所で見られました。運動会の最中に、御柱の意味や取り組みの実際を児童の声で発表説明した学校もあり、博物館の企画にも理解が深まりました。

展覧会関連イベントを直接学校内に持ち込むという、博物館にとって初めての試みとなりましたが、穂高西小学校・豊科北小学校・堀金小学校・



写真6 倉平御柱飾り作り（穂高西小）



写真7 学校に立った田尻南木戸御柱（堀金小）

三郷小学校の4校でこのような取り組みが実現しました。御柱立て行事に直接体験した人から見学等の形で参加した人まで、総計約7000名という取り組み実績を得ることができました。また、対象となった御柱行事が活性化したり、学校の教育活動として今後継続していく計画が示されるなどが、取り組みの影響として出現しています。

3 身近な道祖神をイラストに描こう！

(高校生を対象に)

繰り返しになりますが、高校生の博物館利用は大きな課題です。当然、その解決に向けては博物館側からの働きかけが必要であり、今回の企画に際して高校生が係わる活動等ができないか検討を重ねました。

道祖神展での企画の一つに、来館した方にその後安曇野を代表する道祖神を直接訪ねその魅力等を楽しんでもらう構想がでてきました。市内各地に点在する道祖神の中から特徴的代表的な10基程度を選び、その概説と案内図を入れた「おみくじ」を用意し、くじで引き当てた道祖神を訪ねるという方法としました。そのポイントとなる「おみくじ」には、道祖神のいわれやご利益をイラストで描き示して、子どもからお年寄りまで親しみやすく興味の持てる魅力あふれるものになりたいと願いました。そして、このイラスト作成に、感性豊かでエネルギッシュな高校生に依頼していくことを、館内検討のうえ決定しました。

まず、市内各高校を訪ねて校長先生はじめ先生方に博物館としての構想を説明し、高校生の積極的な参加に向け協力を依頼しました。地域との連携を強め教育活動を進めることを高校としても課題としているとのことで、美術担当の先生方を含めての検討等を承諾いただきました。間を置かず、市内5高校に加えて松本市に所在する高校から返答があり、美術クラブ員などを中心にイラスト作成に参加する意思が伝えられました。

まず博物館として、旧5町村を単位に代表的であり訪ねやすい道祖神10基を選定し、選ばれた各道祖神を担当する高校を決めました。その上で、描くための参考に各道祖神の概要を説明文にまとめ、写真や資料も添えて高校側に送りました。送られた資料を基に各校の生徒さんが個々の道祖神のイメージを膨らませ、創作した個性的なイラスト作品が次々と博物館に寄せられました。最終的には市内外の5校19名の高校生からの作品が寄せられました。

それぞれの道祖神にふさわしいと判断した10枚の作品を選び出し、紹介の文章と運勢等を記して道祖神イラストおみくじが完成しました。展覧会に来館された方が窓口でこのおみくじを引き、その案内で引き当てた道祖神を訪ねていただけるようにしました。応募作品の原画すべてと印刷されたイラストおみくじは、コーナーを設けて展示としました。さらにおみくじの絵は、市内の菓子店や市観光協会などとタイアップし道祖神にちなむ菓子の箱に入れて紹介することで活用しました。

高校生を展示に直接かかわってもらう企画も初めてでしたが、高校側の配慮と生徒の積極性に支えられ、構想から実施までスムーズに運ぶことができました。特に、作品が実際に活用できて多くの方に手に取っていただけたことで、同世代の方々をはじめ多くの市民の知るところとなった点は



写真8 道祖神おみくじイラスト原画

大きな意義を生じたと考えます。応募者の友達や家族の来館があり、イラストおみくじ片手に道祖神めぐりをする人も出てきました。さらに、協力いただいた地元豊科高校において、社会科の学習に博物館を利用し実施されるという、今後の博物館若年層利活用につながる重要な取り組みとして結実できました。

4 三九郎を組み立て燃やそう！

（伝統行事に関心ある親子を対象に）

学校の活動から家庭や地域に広げる実践として、安曇野・松本平を代表する小正月の伝統行事、三九郎の体験参加を考えました。全国的にはどんど焼き等を名称とする火祭り、道祖神祭りと関係するとされています。三九郎は子どもを中心に進められてきた行事でしたが、近年は保護者のみなさんはじめ地区住民総参加型のお祭りに変わっています。道祖神展の最後を飾るファイナルイベントとして、子どもを中心に多くの方々が参加する火祭りを催そうと企画し準備を進めていきました。

元来は正月行事であり展覧会期間からは季節外れになりますが、できるだけ伝統に近い形で行おうと考え、博物館に近い豊科成相地区に協力いただきながら、場所や手順を例年に近づけようと試みました。一番の問題は、正月の松飾りを地区内の各戸から協力いただいて持ち寄り、丸太等を組

んで稲わら等を混ぜて積み上げ、その火を燃やして祭りとする材料の確保でした。催し物案内の博物館チラシの中に、参加者募集と共に三九郎で燃やすもの、お札やダルマなどの燃料集めへの協力を呼びかけました。

まず、協力を呼びかけた成相地区では、保護者と子どもで構成する育成会が核となり、行事に主体的な参加をする形で呼びかけられました。柱組となる丸太や燃料になる稲わらは、博物館の展覧会場入り口で実物展示する祭り用の小屋の部材を使用することとし、飾りの福ダルマや正月飾り等が募集に応じて集められてきました。地区の三九郎には参加していても親子でゆっくり参加できなかった家族など、市内外からの参加申し込みも増えました。前日や当日には、安曇野らしい祭りに体験参加したいという、県外も含めた家族単位での参加希望が複数舞い込み、イベント開催を前に博物館として手ごたえを感じていました。

いよいよ博物館にほど近い成相八坂神社の一角で三九郎を燃やし道祖神祭りをを行う当日になりました。朝早くから、組み立て経験者の方の指導のもと、飛び入り参加の人も交え多くの人の手で材料が組み上げられ、高く堂々とした三九郎ができあがりました。同時進行で、豆腐汁を代表とする三九郎のご馳走を作って食べる体験講座が行われました。さらに、お祭りには付き物の餅つきが始められ、小さいお子さんも含め交代で杵を持つ姿がたくさん見られました。

祭り開始は正午前、参加者代表の子どもたちが点火する時刻には、三九郎の周りを100人以上の人が取り囲みました。大きく上がる炎を前に大きな歓声が沸き、ご馳走もいただいて満足そうな顔が並びました。ファイナルイベントとして企画した子ども中心の道祖神祭り三九郎は、安曇野で通常行われる行事と一味違った形で、小学生等若者39名を含む参加者総数109名を得て、大きな盛り上がりの中で実施できました。



写真9 ファイナルイベントの三九郎

場所的な事情で依頼をした地元成相地区の方々からは、三九郎を通じて地域の子どもたちに改めて行事の意味や良さを伝えることができたこと、感謝やお礼の言葉をたくさん寄せていただきました。正月になって、成相地区挙げて実施された本番の三九郎行事は、一度経験し慣れたこともあって、例年に増して上手にできたとの報告もありました。小屋作りから組み立てに参加いただいた市内明科の三九郎は、成相とは少し形や段取りが違ったようでしたが、自分たちの行事を見直すことができたという後日談から、伝統行事の交流にもつながったようです。特に、県外を含む他地方から参加いただいた方からは、正月行事という季節との関係で参加が難しい行事に、直接触れ体感することができたと、感激や感動を強くしたという声が伝えられました。

5 魅力ある館内展示の実現と発信

(すべての若年入館者を対象に)

博物館から一步外に出での取り組みとともに、館内の展示そのものをより魅力あるものにグレードアップし、若い年齢層に足を向けてもらう試みも同時並行して進めました。まずは、展示室の内容を具体的に改善し、それをチラシなどに載せて学校を通し各家庭や若者に届くよう発信していきました。本企画展で取り組んだ展示内容の改善について、重点とした3点について触れていきます。

第1に、祭りをテーマとした展示の特性として、それをを行う場や人々、行為など形に残らない要素が多く、具体的に何を形にして展示するかは難しい面も多いのですが、可能な限り実物に直接触れられる展示の実現に挑戦しました。前年のオフネ祭りの展示でも同様の方向で取り組み、来館者の反応に手応えを感じていましたが、地域行事などとの関わりが少なくなりつつある子どもたちに、もっと直に祭り向き合えるよう実物を館内に持ち込み、途絶えつつある物は復元してみました。

各学校の校庭に立てられた御柱の一部は高さ10mを超えますが、展示でも原寸大で制作して斜めに寝かせ、立っている状態では見ることのできない御柱の先端部を見られるようにしたり、主要な飾り部分を限定して展示する形で、御柱の実物を見ていただき飾り物などに手に触れていただきました。三九郎行事を行なう子どもたちがかつて寝泊まりした三九郎小屋は、平成に入ってからほぼ作られていません。70歳代の小屋作り経験者に依頼して、館内エントランス部分に若干小規模にした小屋掛け展示を実施しました。小屋の中には自由に入ることができるようにして、かつて寝泊まりした雰囲気味わえるようにしました。夏の道祖神祭りに子どもたちが曳きまわす舞台も、保存会の方々に特に依頼して分解して館内に持ち込み組み立てて、本物をそのまま展示することができました。

実物の展示でも伝わりにくい祭りの行為については、タブレット端末を用意し、専用のアプリケーションを用いて、観覧者が自由にその映像を見ることが出来るようにしました。前回のオフネ祭り展ではスクリーンを一つに限定し、来館者のために職員が上映操作をしたものに比べ、格段に観覧の自由度が増しました。このようにして祭り風景を映像記録で展示するとともに、全体の半分以上は実物を館内に持ち込んで展示あるいは実物をできるだけ忠実に復元して展示しました。



写真10 タブレット端末を使った祭り映像

さらに、祭りに参加する子どもを輪郭で示した人型として添えるなど、臨場感を高める工夫努力もいたしました。いずれも、子どもたちに体感的に楽しむことを大事にしました。



写真 11 三九郎の小屋掛け

第2として、わかりやすい展示解説は博物館として継続的に取り組んできましたが、とりわけ今回の子ども向け展示の工夫として、解説文の表現や使用する言葉を小学校中学年程度の子どもたちが理解できるように設定しました。文章全体を簡潔にして長文のキャプションに対する抵抗を少なくし、まず立ち止まって説明に目を向ける方策としました。同時に、来館者全体から寄せられた、細かな文字で読みづらい等の声への対応も進めました。

もう一つ、観覧者に博物館で作成した説明を読んでもらうという一方方向の解説から、読み手に呼びかけたり問いかけたりして、一緒に考える等双方向の解説に取り組みました。特に子どもに解説等を実際読んでもらうことを想定して、相手の心情に呼びかけ興味関心を増すための文章表現が

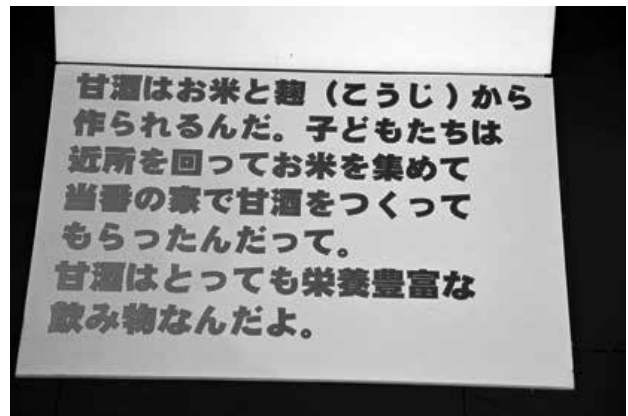
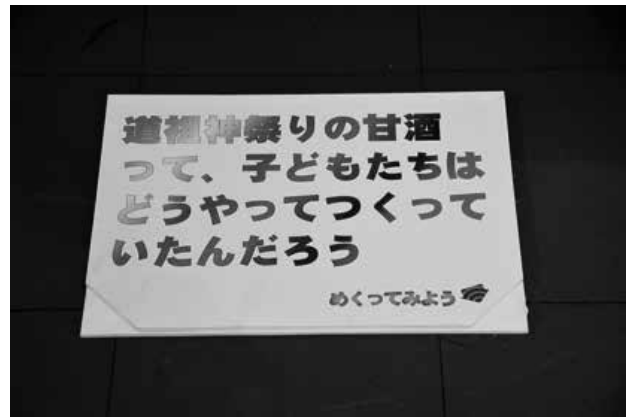


写真 12 問かけ型のキャプション
(めくることで解答が得られる)

わかりやすく親しみやすい展示のカギとなると考え、子ども用に別の解説文を用意してみました。あるいは、キャッチコピーのような短文を用い、展示品に触れる体験へ誘ったり、ワンセンテンスで展示の特徴や価値がわかるような説明表示も試みました。

博物館独自の道祖神キャラクターを描いたポストカード形式の企画展案内を作製し子どもを対象に配布しました。いずれも、本企画展と若年層を近い関係にするねらいで実施しました。

第3には、子どもたちにとって身近で親しみのわく展示物となるよう、自分の地区・町内のすぐ近くにある道祖神や現在の生活の中にある道祖神に焦点を当てた展示に取り組みました。

安曇野市内には、かつての小さな生活共同体である木戸毎にほぼ例外なく存在しています。特に道祖神祭りは子どもを中心として運営され、道祖

神は地域の人々にとって一番身近な産土神的存在として親しまれてきました。しかし、近年の生活事情等の変化で道祖神の祭祀場所が変わるなど祭り行事が行われなくなるにつれ、若年層にとって道祖神は常に意識し目にする対象では無くなりつつあります。

そこで、市内に伝わる種々の祭りを紹介したり廃絶しているものは復元して、子どもたちと道祖神の親密な関係を明らかにした展示をしました。また、道祖神の種別と位置を明示した市内道祖神マップの作成と、数百体の道祖神を写真でまとめ大きなタペストリーでの展示も実現できました。いずれも身近な位置にある道祖神を再認識してほしいとの願いからです。

また、現在の安曇野市において、新たな記念モニュメントとしての道祖神建立が続いている姿や、道祖神にちなんだお菓子やお土産等が多種類に及んで生産されていることを、グッズとして現物展示することで示しました。子どもたちを含む観覧者へ、現代の私たちの暮らしの中でも道祖神が愛され活用され、神としての役割を果たしていることに目を向けたいと考えたからです。

今企画展におけるこれらの若年層来館者増対応の取り組みは、対象となる人たちに向けその実際を発信して、見どころや魅力などを知ってもらわなければ意味をなしません。とりわけ、その中心となる小学生に向け、どのような発信ができるか



写真 13 道祖神グッズ

が大きな課題となりました。

ここまで述べてきたように、若年対応の活動を発信することは、工夫して多くの機会を設け繰り返し働きかけられるよう最大限の努力をしてきたつもりです。特に、市内各小学校に対しましては、各家庭の保護者向けの案内を重点に、先生方への周知や理解してもらうための印刷物を数多く提供してきました。また、館職員は直接各学校に出向いて、展覧会の趣旨やねらいを学校の教育活動と教育的意義に寄せて具体的な説明を積み重ねてきました。

これらの取り組みを通して、保護者の方々や児童のみなさんに博物館の取り組みやねがいが伝わったのは、各校のご配慮ご支援のおかげです。学校と連携しながら進める展覧会事業の新たな事例として、この実践が博物館に展望と意欲を持ったのは、子どもを地域で育てることを大事に考える学校側の熱意があったからであります。改めてこのことに触れながら、学校関係者のみなさまに心より感謝を申し上げます。

三 博物館側から働きかけを（成果と展望）

若年層の博物館利活用を促進していく一環として、道祖神祭りの企画展に際して前に述べた4例の取り組みを進めてきました。課題解消への取り組みの実際を通して明らかになった成果と、将来に向けた取り組みの方向や展望について、活動の実際にもとづき整理していきます。

成果①として、学校との連携により児童生徒の主体的参加による博物館活動の校内実践が複数で実現したことにあります。

現今の学校現場の状況をお聞きしますと、地域の歴史や文化から学ぶ必要性はますます高まっているものの、活動の場や時間の確保・教材化や指導者等学習準備・安全面を含む円滑な学習環境等々、様々な問題があり実現を難しくしている側面もあるようです。今回博物館で提示した企画に



写真 14 榎・住吉道祖神祭りの子ども囃

は、困難な諸条件をあらかじめ館で解消する等、整った条件のもとに実施の働きかけを要請しました。例を挙げると、道祖神そのものに理解や親しみの少ない児童に、ボランティアサークルを紹介し民話の読み聞かせを行ったり、館職員が指導しての出前授業を事前実施しました。また、高校生のイラスト作成に向けて、具体的なイメージ醸成に参考になるわかりやすく直した資料を整え現地への案内を館側で実施しました。

結果として、市内4小学校で直接御柱づくりから柱を立てる活動に参加した実数は、小学生が752名を数え保護者・地域の方を含めると1000名近くに達しました。道祖神ぬり絵に参加した児童数が同じく1000名を超えたことなどを含め、展覧会に際しての連携活動を種々の内容で数多く実現できた実績は、ややもすれば見学という受け身の対応になる学校と展覧会の関係を大きく見直すことにつながりました。博物館としても、展示室中心の企画を打破する試みが実現できたことで、より幅広い展示構想が可能となりました。

成果②として、学校での取り組みに保護者や地域の方が参加・観覧できたことで、この連携活動を体験しその内容や意義等を理解する輪が広がった点があります。

1000点以上の道祖神ぬり絵作品が一堂に展示されたことで、孫の作品や近所の子のぬり絵などを、子どもの展示物を見る目的が初めての来館と



写真 15 出前講座（穂高西小）

なったケースを見聞きしました。御柱の飾り物を作製する活動をPTA行事に位置付けて夏休みに親子で実施した学校もあります。御柱の活動にはほとんど例外なく地域の祭り関係者が加わり、校内に立った御柱を運動会で見た方も含めると、今取り組みの参加者総数は1万人を超える数になったものと想定されます。

博物館に対するいわゆる敷居が高いという意識がごく限られた若年層来館者の背景の一つと考えられると、家族を中心に博物館への親しみを増したであろう今回の意義は大きいと判断します。さらに、小学生が来館するには保護者など家族の方の送迎が不可欠な実情から、学校の教育活動や地域の活動に合わせて取り組みが進められたことも、今後の若年者来館増にきっと効果が出るであろうと期待を込めています。

成果③として、地域の伝統行事を校内で実施することで、道祖神祭りを見直し今後の継続に向け盛り上がりができ、地域や祭りの活性化につながったことです。

博物館に近い成相地区の三九郎行事について述べたように、区長を先頭にして地区を挙げて実施協力を進めるなかで、本番の道祖神祭りにまで及んでの盛り上がりが生まれました。博物館側から成相の商店街に道祖神展のパンフレット掲示依頼に伺った時、商店街の盛り上がりにもつながる活



写真 16 成相福俵曳き（御柱の福俵を曳きまわす）

動だと肯定的な声が多数あったことが裏付けでもありました。近隣の堀金小学校で御柱立て行事を実施した堀金田尻地区では、指導的な立場で参加いただいた祭保存会関係の方々によって、道祖神や御柱の由来等を改めて調査して解説文にまとめられました。児童が飾りつけを作製する学習場面でも、作り方の図解を手に変更で参加するなど、この機会に地区の行事を見直し次世代につなげよ

うとする動きが見られました。

穂高西小学校で御柱を立てる取り組みに参画した穂高柏原の倉平御柱保存会に対して、一日市場上町区の御柱関係者より福俵づくりの相談が寄せられ、保存会同士の技術伝承に発展しています。また、三九郎の組み立てを通し明科と豊科の交流が進んだ例のように、博物館企画に協力する中で自分たちの道祖神祭りを見返したり他地域の祭り等と比較するうちに、伝統行事としての評価や祭りを引き継ぐ意義を再認識し、地域全体の活性化や盛り上がり展開に展開していています。また、穂高駅前では先ほどの倉平をモデルにした新規の御柱が立てられました。次々に御柱等の行事が姿を消す近年の状況から、博物館が学校や子どもを通して道祖神に因む行事を上げたことが、今後の地域文化継承に具体的に若干なりとも貢献できたかと自負しています。

次に、今後の館活動の方向を将来への夢・期待に触れながら考えてみます。

まず、未来の主體的来館者につながる学校との連携に主眼を置いた博物館の諸活動の展開について述べます。今回の展示会に伴うイベントを活用することの効果は、ここまで示してきたように実証できました。昨年度のオフネ祭り展でも子ども中心の体験イベントを企画しており、その延長上で今回が成立していたことも考え合わせると、さらに工夫して魅力ある活動を構想し実施し続けることが重要だと考えます。それには、単に博物館と学校での連携に止まらないで、幅広く各種団体・組織に協力を求め市民こそぞって参加していただける体制づくりに注力する必要があります。

もう一点、展示会という機会以外の館業務遂行に、学校や若年層との連携を図る取り組みを拡充していくことが更なる飛躍のカギになります。展示会というむしろ例外的限定的な場での学校との連携ができたことは、他の場での協力や協働の可能性が大きく高まったと言えます。特に、日常的

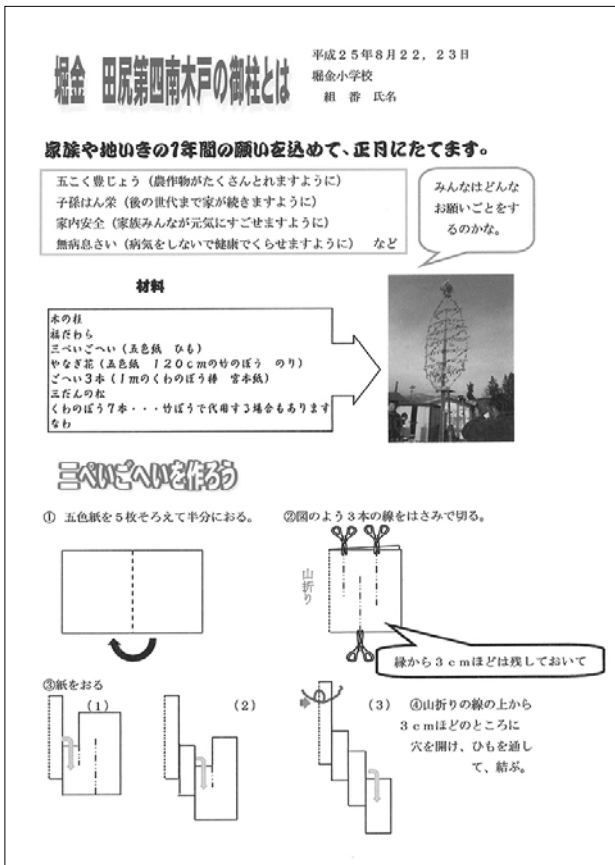


写真 17 御柱の飾り物の作り方プリント



写真 18 高校生の博物館学習

な授業など教育活動と博物館の通常的な業務を濃密に進めていくことができれば、親しみやすく利用が手軽なお互いの関係が成立しやすくなるでしょう。それこそ、これで成長した若年層が後に博物館を継続して訪れるという、長期的展望につながる道だという思いを強くしています。現在、穂高郷土資料館等との協力により、安曇野市内各小学校の3年生全員に、生活の道具に実際に触れ体験してみる『体験教室』が実施されています。今後、安曇野市の小学校を経て成長した人は、小学3年生の時残らず経験した共通の思い出ができます。

そもそもの目的であった若年層の博物館利活用促進への展望に、博物館によるこのような具体的体験を数多く継続的に実施していくことが有効だと再確認しながら、今活動報告のまとめとします。

おわりに

“若者のデート場所に選ばれる博物館” そんな博物館を目指したい、というのが3年前市直営化に際して期待を膨らませながら考えたことの一つでした。しかし、現実の博物館を見向きもしない若年層の存在を前に、夢に近づく道の厳しく遠いことも痛感していたのも事実でした。

手探りのような取り組みを繰り返しているうちに、とにかく一つでも二つでも博物館側から働き

かけをすると、それなりの反応があり時には成果に結びつくことを学びました。それを受けて、展覧会企画に「まず実施ありき」として思いつくまま次々取り組んだ、学校との連携事業を实践報告したものが本レポートです。

それなりに手応え成果があったと自己評価してはありますが、無我夢中で前進しているのが実態でありますので、外部から特に来館者サイドを通してどうなのか気になる面もあります。今後に向けみなさまの率直なご意見ご感想を寄せていただけるとありがたく思います。その上で、今後さらに若者にとって魅力ある博物館に向け進みたいと決意しております。

安曇野に残る「あの世」の風景 ——栗尾山満願寺を中心に

逸見大悟

1、特別展「あの世展」に寄せて

(1) ホトケムカエの光景

かつて安曇野では、新盆に満願寺へ死者を迎えに行く、ホトケムカエ（「精霊迎え」「新仏迎え」ともいう）の習慣がありました。それも、地元の牧や旧穂高町域だけでなく、旧の三郷村や明科町まで、今の安曇野市全域にわたり、また仏教や神道といった宗旨に関係なく、満願寺にホトケムカエに行っていたそうです。新盆を迎える家庭では、8月9日の早朝から歩いて出かけ、或いは遠方の家では前日のうちから出かけて満願寺に泊まりました。帰りは、死者の霊を背負うような恰好をして帰って行ったといえます。

安曇野の人々にとって、満願寺は「あの世」への入口と考えられてきたようです。

参道では地元の子どもたちが仏様に供える花を売り、大人たちは牧大根などの秋野菜の種を売る出店を出すなどしてにぎわったそうです。このような習慣は、昭和50年代ころまで盛んに行われていましたが、近年はそのような家庭も減り、ま



写真1 「あの世展」展示風景

た迎えに来る人も自動車に乗って来るようになるなど、様変わりしています。

(2) 安曇野にみられる「あの世」

平成25年度、豊科郷土博物館の夏季特別展では、「あの世展～安曇野から旅立つ四十九日～」を開催しました。昔から安曇野の人々が思い描いてきた死後の世界「あの世」を展示してみるということで、生きている人なら誰も見たことがないものを再現するという、博物館にとっては実験的な展示でした。

展示は、死者が死装束を着けて野辺送りされる場面から始まります。ここから三途の川を渡って十王と呼ばれる裁判官の裁きを経て、新しく生まれ変わる世界が決まるまでの、死者の魂の旅を追ったものでした。この展示では、「あの世」に関する資料のなかから郷土に伝わるものを展示しました。三途の川を渡った死者の衣服をはぎ取る奪衣婆や、生前の行いによって死者を裁く閻魔王など、それぞれ個性的な姿をした木像や、地獄や極楽の有様を描いた大きな絵が、来館者のみなさ



写真2 「あの世めぐり」講座風景

んに深い印象を刻みつけ、話題となりました。

他方、展覧会を担当した筆者にはもうひとつ、みなさんにご紹介したい視点がありました。それは、「あの世」は私たちの身近にあったということです。市内各地には「あの世」に擬せられた場所がありました。このことは、展覧会期間中の関連イベント「安曇野の『あの世』めぐり」でも若干ご紹介しましたが、それは満願寺だけではありません。市内各地域の開発が進み、便利になる一方で、「あの世」とつながりを持っていた場所が忘れ去られないように、もう一度安曇野の「あの世」を見直してみたいと思います。

2、満願寺の「あの世」の風景

牧の栗尾山満願寺は、平安時代の初めに創建されたといえます。千手観音の靈験によって八面大王を倒すことができた坂上田村麻呂が、千手観音を本尊として祀ったのが寺の始まりだ、と伝えられているのです。

創建当時のことを物語る資料などはありませんが、当寺が戦国時代の古文書を所蔵していることから、このころにはすでに成立していたということがわかります。

そこで満願寺に関係する古文書などから、戦国時代、江戸時代、現代のそれぞれの満願寺の様相を眺めてみましょう。

(1) 戦国時代——整えられた「あの世」環境

① 栗尾山再興のための勸進状

次頁に掲載したのは、戦国時代の満願寺の最古の古文書です（史料1）。

冒頭の「沙門」とは僧侶のことです。お坊さんが書いた文章なので、難しい言葉がたくさん使われていますが、火災で焼失した満願寺を復興するため、金銭や資材を提供してもらいたいという、支援を募る内容です。寺院の建立などのために多

くの人から支援を募ることを勸進といいます。文末にも「現世に七難を払い、他方当来九品の妙土を期す」とあるように、協力した人は、現世だけでなく来世まで仏様の御利益にあずかって素晴らしい世界に赴くことができると考えられていました⁽¹⁾。

この文書が書かれたのが弘治2年（1556）ですが、それより少し前の天文20年（1551）から甲州（山梨県）の戦国大名・武田晴信が安曇郡南部に攻め込んできていました。結局、翌年に小岩嶽城が落城して安曇野も武田氏の支配下に入りますが、そんな政情不安があったなかで火災が起こります。これが戦乱によるものかどうかはわかりませんが、「悉く伽藍などを一時に焼失す」とあるように大きな火災だったようです。文書を書いた僧侶は、「時澆季に及び、正法廢するの砌」つまり、世も末となり、正しい仏教の教えがすっかり廃れてしまったと嘆いています。

この文書でも最初に「極楽の東門、閻魔王宮の最前」とあるように、西方極楽浄土への入り口であり、閻魔王の宮殿の前に当たる、あの世の入り口だと述べています。さらに「御山の為躰は…」のくだりからは、満願寺がある山を紹介しています。御堂の前にある川は「三途の河」と呼ばれていて、ここに橋が架かっている。善人はこの橋をたやすく渡れるが、罪人が渡ることはできない、といえます。

また左右には「死出山」と呼ぶ山がある。ここを超えると六道への道が分かれ、百三十六地獄の景色が広がっている、といっています。六道とは、人が死んでから生前の行いに応じて生まれ変わる先の世界を指し、地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道の6つがあると考えられていました。そのうちの最も過酷な世界が地獄で、そのなかにも136の世界があるとされ、死出山を越え

(1) 『信濃史料』第12巻126頁。本史料の写真や解説は、『穂高町誌 歴史編上・民俗編』213～217頁にも掲載されています。以下、『穂高町誌』とある場合は、この巻のことを指します。

【史料1】



写真3 「栗尾山精舎再興勸進状」(『穂高町誌』より転載)

【読み下し文】

敬うやまい白まうす 勸進沙門かんじんしゃもん

殊ことに貴賤道俗きけんどうぞくの哀憐あいれんを蒙こうむり、信州栗尾山精舎しんしゅうりしやせやを再興せしめんことを請こうる状

それおもんみるに彼の寺は極楽の東門、閻魔王宮の最前、往生浄土の直因、田

村麻呂の創始なり。結界の地を卜ぼくし、若干の精舎を建つ。本尊は涌出千手観音、

忝かたじけなくも彼の尊そんは、利益余尊りやくよそんに超こえ、娑婆施無畏しゃはせむいの居士こなり。されば、濁世末

代の観音と名づく、その言、憑よりどころあり。何れの輩いすか帰敬ききやうせざらん、誰人たれひとか参詣

せざらんや。先ず、御山みやまの為躰ていたらくは、御堂の前に川あり、三途さんずの河と号す。ここ

に橋あり、罪人は極重によつてこれを渡るを得ず。善人は早速これを渉る。罪

人の軽重けんじゆう顕正けんせいの橋なり。また左右に山あり、死出山と号す。これより六道相分

かれてのち、一百三十六地獄の有様丁寧なり。或いはまた、堂の良うらやまに当たり毘

羅樹らじゆあり。これ罪人來り集まるの所なり。よつて一度参詣の族は罪障ざいしょうを消息しよくし、

仏果ぶつかに至ること疑うたがいなきものなり。然しかればすなわち、時澆季ぎやうきに及び、正法廢

するの砌みきり、殊じゆくらんに濁乱じやくらんの時節、寺内より火起こりて、悉ことごとく伽藍がらんなどを一時に焼失

す。ここに本願無上ほんがんむじやうの大願だいがんを發はし、十方旦那じつぽうだんなに勸すすめて一紙半錢いっしはんせんの奉加ほうかを憑たのみて

再興を勵むまし、寸鉄尺木すんてつしちぼくの助力を乞こいて造立ぞうりつを営いとなまんとす。されば、千里の

路みちも一步より勸すすめ、万丈の堤つつみも蟻穴ぎけつより窺くつろぐと云々。合力ごうりきの緇素しそ、助成すけいの尊

卑び、現世げんせいに七難しちなんを払い、他方当來九品の妙土みょうどを期こするのみ。よつて勸進沙門敬こつ

て白まうす。

弘治こうじ式年し 丙辰ひのえたつ 今月吉日

ると、六道や136もの地獄の情景が展開されている、というわけです。また、お堂の良すなわち北東の方角に毘羅樹びらじゆという木があって、死者の魂が集まる所とされました。

この文章から、当時の満願寺の境内やその周辺の山には、橋やお堂といった寺院に関係した建築物があるだけでなく、川や山、樹木などで特筆すべき自然環境があったようで、それらが一体となって、当時の人々にあの世を連想させていたということが感じ取れます。

ただ、昔は満願寺が現在地よりさらに奥にあったとも言われています。それがいつ頃のことなのかはわかりませんが、戦国時代に現在地にあったかどうかも含めて今後の研究が必要です。

なお「死出山」は、現在のどの場所に当たるかは不明です。ただ、こののち松本城主の小笠原氏が出した文書の中で「四手山」が満願寺の領地だと認めていることから、死者があの中世に向かって越える観念的な死出の山を言っていたのではなく、実際にあった地名だということがわかります。

これは推測ですが、「しで」は、「紙垂」「幣」などという文字も宛てることができます。もともとこの山は神様を祀るための神聖な山だったと考えられます。

現在、夏場に満願寺を訪ねてみると、水が豊富で湿度が高いことに驚かされることがあります。想像をたくましくすれば、水分みくまりの神を祀っていたのかもしれない。

また、同じ小笠原氏の文書の中に、すでに「法然堂」も出てきます。現在、微妙橋(2)の手前に小さなお堂があって、周りに配水池や墓地があるところでは、

② 庶民の信仰を集めていたお寺

この火災のあと、戦国時代から安土桃山時代に

かけて、松本城主など武士たちの支援を受けて満願寺は再興を果たしました。しかし、だからといって菩提寺や祈願寺のような特定の氏族だけの寺にはならず、庶民の信仰を集める寺として、多くの人の信仰を集めていました。

弘治2年の勸進状から約30年後の天正11年(1583)ごろから、松本城主の小笠原氏らが出した古文書が数点、満願寺に残っています。そのうちのひとつ、天正13年2月10日付けの文書(史料2)は、小笠原氏の家臣であった溝口美作みまさかのかみ守貞秀さだひでという人物が、城主の小笠原右近大夫貞慶うごんだゆうさだよしの命令を受けて出した文書です。⁽³⁾「下立」という言葉の意味はよくわかりませんが、「未だその修理を加えず候」とあるので、おそらく本堂の工事が進んでいなかったようです。そこで筑摩・安曇両郡ばんじょうの番匠(大工)たちが1人5日ずつ出てきて作業するようにと指示した内容でした。

これは異例の指示だったのかもしれませんが、だから「現世後生のため」という仏様の御利益があるからという理由をつけて動員を命じたのだと思います。

職人たちの動員もあってか、この年の9月には本堂の棟上げもできる目途が立ったようで、史料3のような文書も出されました。⁽⁴⁾

本堂の棟上げの際には、両郡つまり安曇・筑摩両郡の貴賤、身分の高下を問わず志次第に参詣してよい、とあります。それ以下は喧嘩や口論を禁止する文言が続きます。

この2点の文書からわかることですが、まず史料2の番匠を動員する文書からは、筑摩・安曇両郡の番匠たちが満願寺で働けば御利益がある、という認識がすでにあつた、ということが推察されます。

また史料3に「貴賤」という言葉が出てきてい

(2) 『信濃史料』第17巻4頁。『穂高町誌』220頁。

(3) 『信濃史料』第16巻237頁。『穂高町誌』219頁。

(4) 『信濃史料』第16巻356頁。『穂高町誌』219頁。

【史料2】

栗尾山満願寺本堂、
下立雖有之、未加其修理候、
因茲、塚間・安曇両郡之番
匠衆、為現世後生候間、
老人にて五日宛細工無難洩
可相勤候者也、
仍如件、
(黒印) 二月拾日
観音坊 溝口奉之

【読み下し】
栗尾山満願寺本堂
下立これありといえども、未だその
修理を加えず候。ここにより塚間・
安曇両郡の番匠衆、現世後生のた
めに候間、老人にて五日ずつ細工難
洩なく相勤むべく候ものなり。よつ
て件の如し。
二月拾日
観音坊 溝口これを奉る

【史料3】

定
九月十二日 本堂棟上二付
両郡之貴賤、志次第
可令物詣候、自然
喧嘩口論之輩者、
縦雖結縁闕候、速
加成敗者也、
仍如件、
天正十三年潤八月廿日
(黒印)

【読み下し】
定め
九月十二日、本堂棟上げにつき、
両郡の貴賤、志次第物詣せし
むべく候。自然喧嘩口論の輩は、
たとい結縁を闕き候といえど
も、速かに成敗を加うるものな
り。よつて件の如し。
天正十三年潤八月廿日
(黒印)

ます。支配者層である武士も一般の庶民も希望があれば誰でも参詣して良い、ということですから、満願寺がこの時代すでに庶民までが信仰する寺であったことがわかります。

さらに「両郡」、安曇・筑摩両郡という、広範囲にわたる人々の信仰を集めていたこともあわせて読み取れます。

(2) 江戸時代——十返舎一九の来訪

① 『続膝栗毛』に描かれた満願寺

江戸時代後期の文化11年(1814)、すでに『東海道中膝栗毛』を世に出して売れっ子作家となっていた十返舎一九が安曇野を訪れました。これは、『続膝栗毛』を執筆するための取材が目的でしたが、主人公の弥次さんと喜多さんに当地を歩かせてほしいという松本や安曇野の文化人たちの要請を受けたものでもありました。

この取材をもとに出来上がったのが、『続膝栗毛 八編』の上下巻です。満願寺の記事で多くのページが割かれています。

八編下巻の冒頭には満願寺の威容が書かれています(史料4)。

境内にはすでに36ものお堂が軒を連ね、大伽藍があったことがわかります。

このほか、境内より手前に「無明の橋」、「さいの河原」、「法然堂」などの施設のほか、「男鹿の松」という名木も生えていたようです。

② 「無明の橋」

このなかの「無明の橋」は、現在の微妙橋です。

現在のものは明治39年(1907)に木曾福島の大工・瀬川伊勢松らによって架けられたものですが、江戸時代後期には同様の形をした屋根の付いた橋がすでにあつたようです⁽⁵⁾。

当時、無明橋とセットになって畜生橋も架けられていました。現在、畜生橋のあつた場所には舗装された自動車用の橋が架けられています。

(5) 十返舎一九『御法花』の挿絵に当時の橋が描かれています。『安曇野文芸 Vol.29』(2014年)12頁をご参照ください。

【史料4】



写真4 『続膝栗毛』第八編下巻の冒頭部分

従本曾路 善光寺電 続膝栗毛 八編 下巻
 東都 十返舎一九編
 信州栗尾山満願寺ハ。大同二年。田村將軍の開基にして。本堂千手観音。其外如意輪堂。焰魔堂。十王堂。すべて三十六堂。薨をならべて。梁に彫ものし。柱に画き。其結構いふばかりなし。禁より十八町の坂をのぼりて。仁王門山門八雲に聳。古松老杉。森々と出茂りて。岩間をつたふ水のながれも滑なり。(下略)

といふをわたつてまいるこんでござらアのへ」

と説明している箇所があります。

先に掲げた史料1の勸進状にも「三途の河」に橋が架かっている、とありましたね。

ところで、昔は「三途の川の渡し賃」といって、死者の棺桶に六文銭を納める風習があったことはよく知られています。今でも安曇野市の葬祭センターでは、納棺の際に紙に六文銭を印刷したものを用意しています。これは、三途の川に渡し場があって、船で渡るというイメージがあるからです。

しかし古くは、三途の川は歩いて渡るものだと考えられていました。善人は川に架かっている橋を渡し、普通の人は浅瀬を渡し、悪人は深く危険な濁流を渡るといい、この3つの途が「三途の川」の由来になっています。橋を渡ってあの世へ行くという考え方は、そのような古来の思想に基づいているのです。

(3) 近現代——廃仏毀釈から現在まで

① 近現代の受難

明治の初め、松本藩が廃仏毀釈の命令を出し、領内にあった180ヶ寺のうち140ヶ寺が廃寺となりました。満願寺も廃寺となり、伽藍などは放置されたようです。

明治時代後半に再興しますが、今度は終戦直後の昭和21年に観音堂などが焼失してしまいます。ですから、今私たちが見られる境内の建物は、往時に比べれば、ほんのわずかなのです。

このような受難の時代はあったものの、満願寺があこの世への入口という基本的な姿勢はずっと崩さず、現代まで死者を迎える寺としての安曇野の人々の信仰を集めてきました。

② 現在の満願寺

では、現在の満願寺はどうでしょうか。

満願寺の境内に至る入り口には川窪沢川の支流、北の沢という谷川が流れていて、ここに微妙橋という木橋が架かっています。やはり沢を三途の川に見立てて、ここに橋を架け、あの世へ

『続膝栗毛』でも、弥次さんと喜多さんを案内する地元の医者セリフで、

「こゝが高野山の無明のはしとおんなじこんで罪障のふかいもんは懺悔をしてわたらないとこの橋がわたられないもんだんでそつちらの畜生ばし

の入り口としているのです。

また橋を渡りきるとすぐに地蔵堂があります。地蔵堂には延命地蔵菩薩立像えんめいじぞうぼさつりゅうぞうのほかに、千体仏といわれる、15cmほどの小さな仏像が数百体も安置されています。堂の傍らには賽の河原かたわという、石が敷き詰められた場所があり、ここにも地蔵菩薩の石像が数体立ち並んでいます。ここは主に水子や早逝してしまった子どもを供養する場所でした。最近はあまり見かけなくなりましたが、筆者も20年ほど前、この賽の河原に何基か石積みさいが積まれていたのを見た記憶があります。亡くなった子どもを供養するために積んだのでしょうか。

また地蔵堂の千体仏は、かつて子どもを授かりたいと願う人が借りて行ったもので、子どもができたお礼として仏像を倍に増やして返していったから増えたのだといわれています。

この地蔵堂や賽の河原は、あの世の、特に亡くなった子どもたちと交信する場として位置づけられていたようです。

また境内には多くの石仏が立ち並んでいます。江戸時代の後半の年号のある仏像から、新しいものは昭和50年代に造られたものもあります⁽⁶⁾。その由来はわかりませんが、さまざまな願いを込めて造立されたものでしょう。

③ 微妙橋に書かれたお経

明治39年に造られた微妙橋は「お経橋」とも呼ばれています。それはこの橋の床板の裏に経文が書かれているからです。経文のほとんどはかすれて見えなくなっており、また本文はシッダマートリカーしつたん（悉曇）文字という梵字の一種で書かれているため難解です。ただ、表題だけは漢字で書かれてはっきりと残っており、「ふへんこうみょうしょうじょう 普遍光明 清浄しじょう 熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼」というものだということがわかりました(以下「大随求陀羅尼」と略す)。

陀羅尼とは、梵字で書かれたお経のことです。多くの経典は中国で漢文に訳されたのですが、一部は意味が深すぎて訳すことが難しいなどの理由から、梵字の経文のまま日本にもたらされたものもあり、それが陀羅尼として伝わっています。

次頁にその一部の写真を掲載しますが、『大正新脩大蔵経たいしやうしんしゅうだいぞうきやう』に掲載されている「大随求陀羅尼」と照合したところ、次のようなことがわかりました⁽⁷⁾。

- i) 経文は大部分が横書きであり、細長い床板1枚当たり横に3～4文字くらいずつ右から左へと配されている。
- ii) 床板は必ずしも経文の順序通りに並んでいない。
- iii) 経文の一部が『大正新脩大蔵経』掲載の「大随求陀羅尼」と一致していない。

ii) について、満願寺住職の丸山晃氏は、この経文は現在の微妙橋が明治39年に完成するより以前に書かれたものと言われましたが、床板が順序通りに並べられていないのは、このことを裏付けるものだと思います。おそらく、廃仏毀釈以前にあった無明橋の床板を転用したのでしょう。

iii) については、コピーがなかった時代、お経などの書籍は何度も人の手で書き写されて伝えられたため、一部に誤写があった可能性もありますし、それぞれの宗派の解釈によって経典が少しずつ異なって伝えられたのかも知れません。

経文についてはさらに研究する必要があると思いますが、いずれにせよ、この「大随求陀羅尼」は一切の罪を消し、さまざまな福德を得る御利益があるといわれています。死後の世界に赴くにあたり、少しでも生前の罪を軽くしたいという願いから、このような経文が書かれたのかもしれない。

(6) 『穂高町の石造文化財 解説・資料編』270～278頁。

(7) 『大正新脩大蔵経』第20巻616頁掲載のものと照合。



写真5 満願寺の微妙橋



写真6 微妙橋の床板裏の陀羅尼

(4) 小括

以上、戦国時代から現在までの満願寺の境内やその周辺の様子を見てきました。一旦、今までの要点をまとめてみたいと思います。

満願寺は「あの世」の入口として死者の霊が集まる所だと考えられていました。寺の手前には三途の川がすでに用意されていて、ここに橋が架かっており、ここで一旦善人か罪人かの判定がなされるようになっていました。

【史料5】「大随求陀羅尼」の一部



【梵字部分の読み方】冒頭の四文字「ボ・ダ・バ・シ」までは縦書き、それ以降の「ナン・サ・マ・ンダ・ジンバ・ラ」は、右から左への横書きになっています。

写真7 床板裏の一部

橋は、死者も渡っていくものですが、生きている人も渡って参詣することができます。生きている者にとって、橋やその奥にある境内は、「あの世」を疑似体験するとともに、日ごろの行いを反省するための装置になっていたのではないのでしょうか。

他方、現代までホトケムカエに行く習慣が続いていたということは、死者が帰って来る「この世」への出口としての役割も果たしていたとも言えるでしょう。

そんな満願寺は、安曇郡だけでなく、筑摩郡まで、広い範囲の人々の信仰を集めていました。

その信仰も、単に御利益を求めただけではなく、生者が死後の世界と交信したり、死者の霊が「あの世」と「この世」を行き来したりする出入口であるという前提のもとに成り立っていたということです。

3、私たちに身近な「あの世」

満願寺のように、安曇野市のほぼ全域にわたるような広い信仰圏を持つ寺院がある一方で、当然、小さな単位の地区にもお寺やお堂がありますが、そこも「あの世」と交信する場所だったと考えて良いと思います。そこで、地区のお寺や集落のお堂に目を移してみましょう。

(1) 平福寺

長尾山平福寺は、平安時代の長徳年間（995～998）の創立と伝えられています。創建当時の状況がはっきりわかるものはありませんが、満願寺同様、中世には地域のお寺として崇敬を受けていたと考えられています。

三郷地域では、新盆に満願寺ではなく、平福寺に新仏を迎えに行っていたところもあったようです。

境内には十三仏の石像が祀られています。十三仏とは、人が亡くなってから四十九日までは七日ごと、それ以降は百箇日、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、三十三回忌といった節目節目で死者を守ってくれる仏様です。

また、境内の絵馬堂では奪衣婆の木像も見ることができます。

平福寺にも満願寺にも、そしてその他のお寺にも境内には大体、石像の六地藏が置かれています。これは死者が「あの世」で裁判を受けたあと、六道のうちの生まれ変わる世界まで案内してくれる仏様ということで祀られているのです。

平福寺の境内を歩いてみると、様々な仏像に「あの世」とのかかわりを持たせた形でお祀りしていると感じられます。



写真8 平福寺の十三仏（文殊菩薩）



写真9 目赤不動

(2) 目赤不動の十王像

このほか、地域の人々がお祀りしているお堂もご紹介します。

掘金三田・田尻区にある目赤不動は、慶長3年(1598)の造立と伝えられています。脇侍として矜羯羅・制吒迦の両童子を従え、忿怒の形相をして参拝する者を睨み付ける等身大の木像は圧巻です。安曇野市の有形文化財に指定されています。

かつてこの辺りには、正福院という寺がありましたが、明治の廃仏毀釈により廃絶。現在不動堂のみが残り、田尻区のみなさんでお守りしています。

さて、『掘金村誌』によれば、昔この不動堂の前に十王堂があったそうです⁽⁸⁾。十王とは、死者の生前の行いを「あの世」で裁く裁判官のことで、閻魔王もそのひとりです。四十九日までは七日ごとに裁判を行い、それでも生まれ変わり先が決まらなければ百箇日、一周忌、三回忌まで裁判が続きます。別表に十王を示しましたが、それぞれの王はまた十三仏の垂迹(化身)だとも考えられています。

田尻の十王堂には大正初年まで尼僧が住んでい

【別表】十王と十三仏

死後の日数・年数	十王	十三仏
初七日 (7日)	秦広王	不動明王
二七日 (14日)	初江王	釈迦如来
三七日 (21日)	宋帝王	文殊菩薩
四七日 (28日)	五官王	普賢菩薩
五七日 (35日)	閻魔王	地藏菩薩
六七日 (42日)	變成王	弥勒菩薩
七七日 (49日)	太山王	薬師如来
百箇日 (100日)	平等王	聖観音菩薩
一周忌 (1年)	都市王	勢至菩薩
三回忌 (2年)	五動転輪王	阿弥陀如来
七回忌 (6年)	——	阿闍如来
十三回忌 (12年)	——	大日如来
三十三回忌 (32年)	——	虚空蔵菩薩

たそうですが、堂がなくなってからは、十王像は屋外に置かれて壊れるに任せていました。

現在は目赤不動に向かって左手に置かれています。損傷は激しいですが、一部から十王や奪衣婆の石像であったことがわかります。



写真10 田尻の不動堂の十王

(3) 川口観音堂の十王像

もう1ヶ所、掘金地域で十王が祀られていたところをご紹介します。現在の行政区では岩原・扇町・倉田の3地区に分かれています。かつてここには川口という集落がありました。今でも川口のみなさんは、秋に観音堂、春は道祖神の前集まってお祭りを行っています。

この観音堂の傍ら十王の石像が2体置かれています。ここに十王堂があったかどうかはわかりませんが、観音堂のある辻の周辺には道祖神もあります。

辻は古来から「あの世」と交信する場と考えられていたので、ここに道祖神や十王が置かれるのもうなずけることです。



写真11 川口の観音堂

(8) 『掘金村誌 下巻 近現代・民俗編』862頁。



写真 12 川口観音堂の十王像



写真 13 等々力町区の十王堂

(4) 等々力町区の十王堂

また、個人の所有ですが、穂高の等々力町区にも十王堂があって、木像の十王像が安置されています。

江戸時代には、この辺りを等々力町村とって、南北に延びた街道に沿って宿場町が展開されていました。今でも家並みにその面影を見ることができます。

十王堂はその南のはずれに位置しています。この十王像は、所有者の先祖を供養するために江戸時代の中ごろに造られたもののようです。

明治になって、松本藩領内で廃仏毀釈の政策が行われたため、十王堂も廃止されてしまいます。堂はその後寺子屋として使われていましたが、明治9年（1876）に十王像は他所の寺に預けられました。

平成4年に、もと十王堂があった場所に新たに堂を建て、改めて十王を安置しました。実に116年ぶりのことでした。

さて、安曇野の人々は何のために十王をお祀りしたのでしょうか。

等々力町区の十王の場合、木像の底部に人名が書かれているものがあり、先祖を供養する目的であったことがわかります。

また、生きている者が十王を祀ることで、その人が亡くなったのち、十王の審判が軽く済むようにと祈ることもあったのでしょうか。

これらは個人が、先祖や自分自身のために「あの世」にメッセージを送る行為です。それは先ほど述べた満願寺への信仰と同じような行為だと思います。

しかしもうひとつ、等々力町区の十王堂が町のはずれに置かれていたのは、外から入って来る悪いもの、例えば疫病や外敵などから町を守る目的があったと考えられます。

江戸時代、松本の城下町でも四方の出入口に十王堂が置かれ、町の守りとしていました⁽⁹⁾。

川口は集落のはずれというより、辻に置かれていましたが、これも「あの世」のような異界から悪いものが入って来るのを防ぐ役割を持たせていたのかもしれませんが。

十王堂は、身近にある「あの世」と交信できる施設である一方で、集落の内と外とを精神的に区別し、村や町を守る役割を持っていたのです。

4、「あの世」のこれから——結びにかえて

田園風景の広がる安曇野市内でも、道路や宅地の開発が進み、建物がひしめくようになった現在

ではよくわからなくなりましたが、かつて集落には内と外を区切る境があって、その外は一種の異界でした。

例えば道祖神が集落の外からやって来る病気などの災厄から守ってくれる「塞^{さい}の神」の役割を負ったのも、また十王堂を集落のはずれに置いて町を守る役割を持たせたのも、集落の内と外を明確に区別していたからです。

また集落内部でも、「ここは神聖な場所」「ここは穢れたところ」とか、「ここは〇〇用にする場所」「ここは〇〇を建てる場所」というように、場所によって区別したり、役割を分けたりしていたと推測されます。

さらに、それより広い範囲でも、地域の内と外との境は存在していて、安曇野の場合、その境のひとつが満願寺であったと考えられ、だからこそ

満願寺の再興勸進状でも当寺は「極楽の東門」とか「閻魔王宮の最前」すなわち「あの世」の入口だと書かれたのだと思います。

以上で述べたように、集落という小さな単位の中にも場の区別があり、さらに広範囲でも同じように区別があったとするならば、そこが実際はどういう場所だったのか、現地へ行って地形や植生などの自然環境を観察したり、或いは古文書のような歴史的な資料や古い地図を現地の状況と照らし合わせたりしながら、丹念に調査して確認していかなければなりません。

そのなかで昔の人たちが考えていた「あの世」や、その他諸々の場の認識を捉えていくことも安曇野の歴史を探るうえでの一助となるのではないかと思います。



写真 14 等々力町区の十王堂内のようす

(9) 『松本市史 第二巻歴史編Ⅱ』221 頁ほか。

安曇野市豊科郷土博物館 紀要 第2号

2015

発行 平成27年(2015)年3月31日
安曇野市豊科郷土博物館
長野県安曇野市豊科4289-8
電話 0263-72-5672
印刷 電算印刷株式会社
